

名古屋大学国際機構

## 国際言語センター

## 年 報

第6号

## 目次

巻頭言 .....	木下 徹	1
<b>実践報告</b>		
・名古屋大学短期日本語プログラム NUSTEP における日本語授業 .....	加藤 淳	5
・短期プログラムにおける初中級レベルの口頭表現能力育成と Oral テストの組み立て .....	田中典子・石崎俊子	10
・平成30年度国際言語センター公開講座 「日本語学習支援を始めよう!! 日本語パートナー講座」 .....	衣川 隆生	16
<b>活動報告</b>		
・FD 活動の報告 .....	俵山 雄司	21
・第78期・第79期（2018年度）日本語研修コース .....	衣川隆生・佐藤弘毅	23
・第37期 上級日本語特別コース（2017年10月～2018年9月） .....	永澤 濟	26
・全学向け日本語プログラム 2018年度 .....	李 澤熊	28
・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」 .....	浮葉 正親	32
・短期留学生日本語プログラム 2018年度 .....	石崎 俊子	35
・第19期 日韓共同理工系学部留学生予備教育コース .....	俵山 雄司	37
・オンライン日本語コースの運営 .....	石崎俊子・佐藤弘毅	39
・名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2018年度実施報告 .....	許 明子	40
資料 .....		45

## 巻頭言

# 国際言語センター長に就任して

国際言語センター長

木 下 徹

前センター長の大室先生の後任として、本年4月1日から国際言語センター長に就任しました木下です。大室前センター長と同様に、本学大学院人文学研究科に所属しております。

本センターの淵源としては元々、多年、本学の留学生教育や日本語教育を担当してきた留学生センターが重要なことは言うまでもありませんが、現在の、本学組織上の位置づけという点からは、2005年に策定された「名古屋大学国際化推進プラン」、さらに、翌2006年4月に設置された「名古屋大学国際交流協力推進本部」に遡ることも可能かと思われまます。その上で、本学の国際交流を目指す種々の組織改革を経て、現在では、本センターは、大学本部の「国際機構」という組織の下部組織の一部として位置しています。国際機構は、(1)本学をハブ大学とするAC21という国際的な大学間ネットワークや、本学に関係した海外での危機管理に関する業務を含む「国際連携企画センター」、(2)全ての授業を英語のみで行うGlobal 30 International Program (通称G30)を含む「国際プログラム部門」、 「国際交流部門」「アドバイジング部門」からなる国際教育交流センター、そして、「日本語・日本文化教育部門」と「英語教育部門」の2部門を擁する、当「国際言語センター」から構成されています。(ただし、このうち英語教育部門については先述したG30部門を兼務する教員から構成されていることもあり、本稿では言及せず、別な機会に譲りたいと思います。)

本センターの役割としては、教育面では、留学生センター時代と同様、日本文化に関する諸々を含む広い意味での日本語教育があり、研究面では、本学大学院人文学研究科の応用日本語分野として、そのカバーす

る諸領域を受け持っています。

一方、進行するグローバル化を受けて、名古屋大学の留学生数は、名大のホームページの情報では昨年度末の実績で私費、国費、外国政府派遣を合わせて2641名にのぼります。これは、同資料の一昨年度実績である2462名と比較して実数で、179名、率では約7.3%の増加です。この傾向が続けば本年度もさらなる増加が見込まれます。とはいえ、グローバル化は、日本だけのことでなく、実は、留学生獲得もまた国際的な競争の波にさらされていると言われ、特に優秀な留学生をより多く招致できることは必ずしも容易ではないとも指摘されています。そのような中で、関連した新たな試みとして、この7月には、2週間内外と短期ではありますが、名古屋大学へ将来本格的な留学を検討している人を対象として名大の魅力を知ってもらうことを意図したNUSTEPというプログラムも実施されました。同プログラムは秋期にも予定されています。

このように本センターの役割もますます重要になってきている昨今ではありますが、現在の人員は留学生センター時代から長年、ご尽力いただいた衣川先生が昨年度末をもってご転出され、その後は残念ながらまだ補充されていません。国の財政状況がなかなか好転せず、その対応策の一環として、本センターを含む多くの部局でも、スタッフの採用や昇進に関するポイント制が導入されるなど、マンパワーの充実という点では予断を許さない状況が続き、昨年度と比較すると少ないスタッフで、かつ、センター長は新米の私という、なかなか厳しい状況ですが、みんなで力をあわせて、当センターの果たすべき役割をできるだけ果たしていきたいと思っています。



# 実践報告

---



# 名古屋大学短期日本語プログラム NUSTEP における日本語授業

加 藤 淳

## 1. はじめに

2016年2月から実施を開始した約2週間の短期日本語プログラム（NUSTEP）は、春季（2月中旬）と夏季（7月中旬）の年2回行われてきた。本稿では、2019年春季プログラムの日本語授業での活動内容と最終発表の成果を報告する。なお、この日本語授業で使用了教材は、第1回の2016年春季に作成した教材に適宜修正を加えたものであるため、必要に応じて教材作成の経緯にも言及する。

## 2. NUSTEP における日本語授業

本プログラムの全体の概要や実施目的については、別稿で論じられるはずなので、ここでは日本語授業の日程や教材を示しながら、その狙いを整理していく。

### 2.1 日本語授業の実施期間

2019年春季における日本語授業の実施は、2月11日（月）から20日（水）までの8日で、期間中は毎日午前中の2コマを実質的な授業に充てるというスケジュールである。計16コマの授業内容を表1に示す。

なお、国際言語センターの通常の時間割では1時限の授業開始は8時45分であるが、参加学生の健康状態や当日の活動に関する確認のために15分間の朝礼が設けられており、始業は9時となっている。

### 2.2 日本語クラスの構成

2019年春季のNUSTEPには16大学から29名が参加し、出身の国と地域は、中国、台湾、ベトナム、モンゴル、ポーランドであった。日本語授業開始前に、プレイズメントとして、「人工知能の利用とメリット・デメリット」についての400～600字程度の意見文作成

表1. NUSTEP2019春季 日本語授業の予定と内容（学生配布資料：ふりがなつき）

回	授業日	時限	Aクラス担当 (教室:ALEP3階 日本語演習室1)	学習内容	Bクラス担当 (教室:ALEP3階 日本語演習室6)
1	2月11日(月)	① 9:00-10:30	宗林	聴解:名古屋や中部地域	加藤
2		② 10:45-12:15	加藤	聴解:「名古屋の食文化」/メモの取り方(報告準備) 総合:発表準備① 発表の仕方(発表事例紹介)	宗林
3	2月12日(火)	① 9:00-10:30	宗林	読解:「日本事情(社会・文化・人)トピックディスカッション	加藤
4		② 10:45-12:15	加藤	総合:発表準備② テーマ決め	宗林
5	2月13日(水)	① 9:00-10:30	加藤・宗林	読解・会話:「日本の文化」読んで話す	宗林・加藤
6		② 10:45-12:15	合同授業	発表:日本研究① 伝統と文化報告 (発表①)	合同授業
7	2月14日(木)	① 9:00-10:30	加藤	読解:「日本のモノづくり・人作り」	宗林
8		② 10:45-12:15	加藤	総合:トヨタ産業技術記念館見学 報告準備/情報の取り方	宗林
9	2月15日(金)	① 9:00-10:30	加藤	発表:日本研究② 産業技術記念館見学報告 (発表②)	宗林
10		② 10:45-12:15	加藤	総合:報告準備/インタビューの仕方	宗林
11	2月18日(月)	① 9:00-10:30	加藤	発表:日本研究③ インタビュー報告 (発表③)	宗林
12		② 10:45-12:15	加藤	総合:発表準備③ 原稿作成/アウトライン	宗林
13	2月19日(火)	① 9:00-10:30	加藤・宗林	総合:発表準備④ 原稿作成	宗林・加藤
14		② 10:45-12:15	合同授業	発表準備⑤ 発表練習 (2限:合同授業)	合同授業
15	2月20日(水)	① 9:00-10:30	加藤	修了試験(発表)	宗林
16		② 10:45-12:15	加藤		宗林

と、4、5名ずつのグループ面談で「グローバル化について若者の果たすべき役割」について意見を述べ合うという課題を課し、その結果によってA、Bのクラスに分け、2名の講師が授業を担当した。

参加者の日本語学習歴や学習方法はまちまちで、日本語学習の目的も様々であるが、2週間という短い期間の中でその多様性を十分に活かし、協働活動が円滑に遂行できそうな組み合わせを考えることが必要である。したがって、クラス分けの基準は日本語のレベルではなく、プレイメント課題に対する発話や作文の組み立て方といった言語運用にそれぞれの学生の出身地域や専攻などを考慮して、NUSTEP コーディネータと日本語クラス担当の3名<sup>1</sup>で総合的に判断した。その結果、Aクラスが14名(男子8名、女子6名/漢字圏13名、非漢字圏1名)、Bクラス15名(男子4名、女子11名/漢字圏13名、非漢字圏2名)という構成となった。

### 2.3 日本語授業のデザイン

ここで、前掲の「表1. NUSTEP2019春季 日本語授業の予定と内容」に戻って、日本語授業のシラバスについて概観する。学習内容の冒頭に「聴解」「読解」「発表」「総合」と表記しているのは、4技能のうちの受容に関わる「聞く」「読む」と、産出に関わる「話す」「書く」をバランスよく取り入れることを視野に入れたものである。この学習内容は、教材の冒頭にも掲載し、内容を明示化するためにCan-doチェックも実施した。このCan-doチェックの項目はCEFR(新訳)のB1、B2レベルの記述をもとに教材に合わせて文

言を変えたものである。授業開始時に学生と一緒に読んでCan-doチェックをし、授業の最後に振り返りとして使用した。以下の図1は、教材の抜粋である。

ただし、実際には、母国ではなかなか学習がしにくいであろう、話すことと書くことをどのように引き出すか、という観点から教材を用意した。例えば、第1日2時間目の「聴解：名古屋の食文化」では、名古屋市が作成した、【名古屋公式】だいすき、なごやの食文化「かけ合わせ文化」編他の映像を利用して視聴解で情報を取ることを練習した後で、同席したボランティア学生<sup>ii</sup>と「名古屋めし」について話すことを教室活動として取り入れた。また、この日の宿題は、午後からの活動「日本研究① ものづくり」で得た情報をキーワード、学んだこと、感想の項目で書いて提出するというものである。したがって、聴解の授業は「(日本語話者が普通に話すことを)聞いてメモする」練習も兼ねて実施している。この教材と学習のねらいについては、「3. 教材と学習のねらい」で詳しく述べる。

### 2.4 教室活動における教師の役割

NUSTEPの日本語授業には教師のほか、TAがA/B各クラスに1名ずつ配置された。そのほか、学生ボランティアが適宜、各クラスに4～8名入って会話のパートナーとして活動した。教室活動の主役は学習者であり、協働学習を中心とした授業運営をするというコンセプトのもと、教師は教材を用いたインプットを終えると、学生の活動を促すことに務めた。具体的には4名ほどのグループに分かれたNUSTEP学生の中に1、2名の学生ボランティアが入り、一緒に読解文

NUSTEP 2019		2月11日②
ちょうかい	なごや	しょくぶんか
聴解：「名古屋の食文化」		
《聞く》	日本語で話されていることを聞いて、大事なことをメモできる。	<input type="checkbox"/>
《話す》	自分が聞いて書いたメモを見て、その内容を人に伝えることができる。	<input type="checkbox"/>

図1. NUSTEP2019春季テキスト(2月11日2時間目)の一部抜粋

<sup>1</sup> NUSTEP2019年春季の日本語授業はコーディネーターに許明子、授業担当に宗林由佳と加藤淳の2名が就いた。

<sup>ii</sup> 本プログラムでは、適宜、名古屋大学の学生が日本語ボランティアとして、各クラスに数名入り、学習者と会話をするという教室活動を行なった。この構成については、後述する。

を読んだり、問題点を話し合ったり、課題作文を読み合ったりという活動を行った。その活動の間、教師はTAとともに各グループの活動を促したり、話題についていけないのか日本語力に自信が持てないのかといった理由で、活動に参加できずにいるNUSTEP学生の話をご個別に聞いたりした。

TAには教師より近い立場でNUSTEP学生の発言を引き出すことを依頼した。なお、ボランティア学生には自由に話をしてもらったが、1つのグループに偏らないように適宜、グループを移動してもらった。

### 3. 教材と学習のねらい<sup>iii</sup>

教材は全て、既存の公的な映像資料及び、書き下ろしの読解教材をもとにしている。NUSTEPプログラムにおける日本語学習の目標は、「アカデミックな日本語の産出ができるようになること」であり、修了試験にはプレゼンテーションが課される。発表の課題は、プログラム中に学んだり、体験したりしたことをさらに深めて、1人10分程度のプレゼンテーションをするというものである。教材作成にあたっては、日本語運用を活発にする「仕掛け」を作ることを目的として、できるだけレリア・生教材を使用し、加工や教材化は最小限にした。その上で、以下に述べる3つの観点を重視した。

#### 3.1 教室外の言語活動を活発にするための教室活動

まず、2週間という短期間に、できるだけ多くの日本語や日本文化、日本人の生活に触れたいという参加者のニーズを踏まえた上で、名古屋という東京や京都にはない文化にも触れてもらうための工夫をすることである。先に述べた、初日の聴解の授業では、名古屋市が作成した公式映像<sup>iv</sup>を教材として取り入れている。公式映像を用いたのは、自然なスピードと語彙とで情報伝達を目的として作成されたものであることが第一の理由である。NUSTEPのプログラムにおける、

<sup>iii</sup> NUSTEPにおける日本語学習の意義と日本語授業のコンセプトについては、2016年度日本語教育学会研究会第2回(中部地区)大会での口頭発表、及び、2017年度第4回支部集会【中部支部】の「交流ひろば」でのポスター発表で詳細に述べているため、ここでは割愛する。

<sup>iv</sup> 7月11日1時間目に使用したのは【名古屋市公式】どえらけにゃあおもしろえなゴヤ 魅力満載 名古屋！2時間目に使用したのは、【名古屋市公式】だいですき。なごやの食文化「かけ合わせ文化」編、「味噌文化」編、「茶の湯文化」編である。いずれもYouTubeでの閲覧が可能である。

日本語の教室での日本語学習の機会はそれほど多くはない。教室の外で得た情報を教室に持ち込んでその内容を確認し、教室で学んだことを生かして教室外の言語活動を活発にできるようにすることが目的である。

#### 3.2 アカデミックな言語活動の場の提供

次に、名古屋大学という高等教育機関での研究や授業の一端に触れたり、学生との交流で経験したりしたことをアカデミックな手法で表現することを学べるようにすることである。先に述べたように、日本語授業では修了試験として最終発表を課している。論理的な説明の構成や表現、書き言葉と話し言葉の違い、学術発表の表現や語彙の選び方、さらに剽窃をしないで適切な引用をする方法などを学んで、高等教育機関で学ぶ学生らしい日本語の運用を覚えてもらうことを目標としている。

主な教材としては、教師の書き下ろしによる読解文を用意した。2日目の読解の授業では「日本事情」に関する論述読解文を読み、その7つのテーマ「日本のエネルギー、日本の交通、日本の環境問題、日本の仕事、日本の教育、日本の結婚事情、日本の科学技術と生活」について話し合う。2時限目には、このトピックを含めてテーマを決め、最終発表の準備をする。なお、ここで決めたテーマに沿って質問事項を考え、15日(金曜日)の午後に実施される、日本人学生及び名古屋大学の留学生との交流でインタビュー調査をすることにつながるようにしている。

#### 3.3 段階的な発表課題によるアカデミックスキルの積み上げ

また、13日、15日、18日にそれぞれ、あらかじめ指示されて準備をした課題に沿って発表をする機会を設けており、徐々にアカデミックな発表に慣れていくようにしている。2月13日の発表①では、主に午後に実施された有松絞体験や着物の着付け講座や名古屋大学の学生サークルとの交流、といった経験から学んだことやそれに対する意見を述べることを課し、各クラス、4、5名のグループの中で発表した。発表②は、午前の授業でトヨタ産業技術記念館での見学で調べた内容を考えて下調べをしておき、午後の見学で情報を集めた結果を、翌日の授業でクラスにグループで発表するという手順で構成した。発表③については、あらかじめ各自の最終発表テーマを決めておき、その内



容に即した質問項目を用意し、午後の学生との交流インタビューで得た結果を翌日の授業で発表し、質疑応答によって最終発表の内容を深めていくというものである。

こうした3回の発表の機会によって、問題を発見して情報を収集し、自国の事情と比較するなどの分析を経て考察に結びつけ、自分の考えを日本語で説明するということに慣れていくようにした。アカデミックな発表に重点を置いているのは、それぞれの専門知識を持っている学生の能力を活かし、形式や表現を適切に運用すれば産出されたものの完成度がかなり高くなるからである。また、アカデミックな発表をしたという達成感によって、今後の日本語学習への動機付けを図ることも狙いである。

#### 4. 修了発表

最後に、各クラスの修了発表のテーマを一覧にして表2、3に示す。このテーマを見る限り、「アカデミックな日本語」という実は抽象的な概念を各自がそれぞれの方法で取得し、産出したことがうかがえよう。なお、最終発表は各自スライドを使用しての個人発表である。スライド作成にあたっては、いわゆるコピーペが剽窃であることを説明し、著作権法に留意した引用の方法や出典の提示の仕方など、細かな指導も行った。

最終発表会については、事前にスケジュールを決め、プログラム表を作成した。学生がお世話になったホームビジットのホストファミリーや学生寮のスタッフなど多くの観覧者の参加があり、その参加者からの質問にも正確な日本語で答えられていた。このことから充実したプログラム体験であったことがわかる。ただし、時間と教室の関係で、ABクラスの交流が限られていた。特に最終発表については、前日の発表準備日の合同授業や午後の準備活動でお互いの発表を見聞きはしていたが、発表当日の交流がなかったことを惜しむ声もあった。この点については、今後の課題であろう。

表2. Aクラス最終発表スケジュール

タイトル	発表時間
環境を守るための技術より大切な人の意識	9:00-9:10
若者のキャリアに対する考え方—日本人と留学生の比較—	9:10-9:20
日本の電気製品と自動車のリユースについて	9:20-9:30
若者が働きたい会社—日本人と留学生の比較—	9:30-9:40
日本の教育「教師の待遇—小中高教師—」	9:40-9:50
労働人口減少への対策—日本人と台湾人の意見—	9:50-10:00
教育モデルとしての自宅学習のメリット・デメリット	10:00-10:10
人工知能と介護—メリットとデメリット—	10:20-10:30
	10:30-10:40
日本の交通機関の利用と生活	10:40-10:50
「就活ルール廃止決定」についての大学生の意見	10:50-11:00
日本の電車のマナーから見た日本文化	11:00-11:10
日本の教育「ゆとり教育」	11:20-11:30
AIに関する大学生の意識—自動運転について—	11:30-11:40
AIとの共存社会を作るために—大学生の意見—	11:40-11:50
総評・ゲストのお話	11:50-12:00

表3. Bクラス最終発表スケジュール

タイトル	発表時間
起業するための教育は必要か	9:00-9:10
外国語の早期教育について	9:10-9:20
多数派は常に正義か - 日本人に見られる行動 -	9:20-9:30
地球温暖化対策 - 生活レベルでの取り組み -	9:30-9:40
日本におけるいじめ問題	9:40-9:50
日本の非婚化—日本人にとって結婚とは—	9:50-10:00
少子高齢化の現状と日本人の意識	10:00-10:10
日本の「ゆとり世代」と中国の「中国90後達」の比較	10:20-10:30
留学の意義 - 日本人学生の意識 -	10:30-10:40
日本人女性の社会的地位—「女らしさ」から考える—	10:40-10:50
日本におけるプラスチックごみに関する意識問題	10:50-11:00
エスカレーターから見える日本人の行動 - 国民性の考察 -	11:00-11:10
日本の新しい魅力発見 - 禁煙文化 -	11:20-11:30
女性の社会進出—モンゴルと日本を比較して—	11:30-11:40
結婚観の違い	11:40-11:50
総評・ゲストのお話	11:50-12:00

#### 5. 評価と日本語授業への振り返り

日本語授業では単位は出さないが、修了証を渡すため、授業評価を行う。評価内容は出席20%、課題(宿題)30%、最終発表50%で100点満点の評価を名古屋大学の基準に即してA/B/C/Fの段階に分ける。た

<sup>v</sup> 期間中、NUSTEPの学生は愛知東邦大学の学生が運営するTOHO Learning Houseに滞在している。ここでいう学生寮のスタッフは愛知東邦大学の学生である。名古屋大学の学生だけでなく、他大学の学生との交流も参加者には貴重な体験となっている。

だし、これまでにFがついた学生はいないのが現状である。

なお、プログラム終了時には、Can-do チェック表への書き込みと自由記述アンケートを実施した。その結果、参加学生のほとんどが、「日本語を話す機会が多かった」「自国では日本語で会話することがなかったが、このプログラムに参加して、会話の能力が高くなった」「普通の日本人の生活と社会を見た」「中国人だから漢字は読めるけれど、日本語の意味や読み方を改めて知って驚いた」など、日本での生活体験を含めて肯定的なコメントを寄せていた。また、「日本語で書くことが難しい」「自分の考えを話すのが難しい」「自国でも発表はしたことがなかったので大変だった」「自然な言葉遣いがわからなかった」「準備をして質問したのに、日本人学生から出た意見に対して適切に対応できなかった」「聞き取りと口語力が足りない」といった学習課題を発見したことも挙げられていた。一方で、「宿題が多かった」「時間が足りない」「準備の時間が短かった」「もっと交流する機会が欲しい」といった意見も多くあった。

これまでは、プログラム全体の目的である、「日本や名古屋大学に興味を持ってもらい、将来の交換留学や大学院進学につなげること」に関連性を持たせた方向性を実現するためのシラバスを組み立て、日本語授業を展開してきた。しかし、それによって学生の負担が大きくなっていくことは反省すべき点でもある。少

なくとも名古屋大学に興味を持った学生が今後も日本語学習を継続し、進学を視野に入れた正規留学先の候補として名古屋大学を考えられるようにするには、短期間でそれなりの学習効果を実感できるようにすることも重要である。そのためには、どのようなアプローチで日本語授業を組み立てるべきか、どのようなアウトプットを促すためにどのようなインプットを与えるか、教材をどのように準備していくのかといった実践的な議論をする以前に、プログラム全体における日本語学習について、学習者のニーズを確認し直した上で、それにどう応えるかという観点からの見直しも必要であると考えられる。

#### <参考資料>

松尾憲暁・加藤淳・椿由紀子・徳弘康代・初鹿野阿れ  
(2016)「超短期プログラムにおける日本語学習—名古屋大学短期日本語プログラム2016年春季の取り組みから—」『日本語教育学会2016年度日本語教育学会研究集会第2回予稿集』pp.45-48, 愛知県立大学長久手キャンパス, 2016年6月11日.

松尾憲暁・加藤淳・鈴木かおり・徳弘康代・椿由紀子・福富七重・安井朱美 (2017)「名古屋大学短期日本語プログラム (NUSTEP) の取り組み」日本語教育学会2017年度日第4回支部集会【中部支部】「交流ひろば」ポスター発表資料, 名古屋工業大学, 2017年7月8日.

## 短期プログラムにおける初中級レベルの口頭表現能力育成と

### Oral テストの組み立て

田中典子・石崎俊子

#### 1. はじめに

名古屋大学に在籍する留学生のためのコースが多様化し、2018年度より、名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（Nagoya University Program for Academic Exchange - NUPACE）の日本語コースのカリキュラムも大きく改編された。英語による授業が行なわれる専門教育課程に所属するNUPACEの留学生は、研究のための読み書き等の高度な日本語は必要としない。そのような中で日本語の学習目的・位置づけ・優先順位に変化が見られている。本実践では初中級レベルのコース目標を実生活の中でのコミュニケーションができる運用能力育成におき、当該レベルでのアカデミックな発表ができることを最終到達目標として、教科書・シラバス、およびOralテストを大きく変えることとした。Oralテストを中心にその試みについて、報告する。

#### 2. 実践概要

本実践は、初中級レベルの口頭表現能力の向上を目的としたクラスで行われた。この目的に沿った授業を進めていくため、「自分のこと／自分の考えを伝える力」「伝え合う・語り合う日本語力」を身につけることを目的にしたと記されている『できる日本語 初中級』（嶋田:2012）を教科書に選定した。この教科書はOPIやCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）をもとにしたプロフィシエンシー（熟達度）重視の教科書である。従って文法説明は最小限にとどめ、場面・状況が明確化され、各課の行動目標（Can-do-statement）が提示されている。（嶋田:2019）

#### 3. 授業概要

コースは1日1コマ90分授業を週5日、15週間行う。『できる日本語 初中級』の1～15課のそれぞれ

の課のトピックは2つのトピック「スモールトピック」で構成されている。以下、各課に含まれる各項目を簡単に説明する。

「話してみよう」：その課の導入。

「チャレンジ」：トピックに基づいた会話を表したイラストを見ながら日本語を話すことにチャレンジする。

「言ってみよう」：実際に遭遇するであろう場面・状況の会話を「固まり」（羅列文や準段落）で練習する。

「やってみよう」：音声を聞いてタスクに取り組む。

「できる！」：各課の行動目標に即した総合的な活動を行う。

授業は1課を4コマで完結させ、3課ごとに内容の定着を測るため、3課分の範囲で、筆記試験、Oralテスト、エッセイテストを実施した。第3課のスケジュールを例に授業の進め方を表1に示す。

表1 第3課と3課毎のテストスケジュール

	教室活動
1コマ目	Lesson 3 「わたしの目標」 スモールトピック1 「これからの計画」 話してみよう Goal Description 提示 チャレンジ 言ってみよう 提出物：Lesson 2 Essay
2コマ目	Lesson 3 「わたしの目標」 スモールトピック1 「これからの計画」 チャレンジ（再） やってみよう（答え合わせ セルフチェック） ロールプレイ
3コマ目	Lesson 3 「わたしの目標」 スモールトピック2 「夢に向かって」 チャレンジ 言ってみよう
4コマ目	Lesson 3 「わたしの目標」 スモールトピック2 「夢に向かって」 チャレンジ（再） やってみよう（答え合わせ セルフチェック） できる！

	話読聞書 Essay Sharing : Lesson 2 Essay
テスト1-1	● Written テスト (Lesson 1-Lesson 3)
テスト1-2	● Oral テスト (Lesson 1-Lesson 3)
テスト1-3	● Essay テスト ※読解活動 第1回 <sup>注1</sup>

#### 4. Oral テスト構成と実施意図

前述したように、3課ごとに合計5回のOralテストを実施した。テストは達成度を測るのみならず、形成的評価の効果があるように、様々な口頭表現能力を伸ばすことを念頭に表2のように構成した。それぞれのテストについては、実施日の2授業日前に内容についての予告を行なった。冬休みをはさんで予告を行なったポスター発表については、冬休みを準備のための時間に充てるように指導した。2018年度後期の初中級クラス（学習者17名）での実施内容について報告する。

##### 4.1 ロールプレイ

テスト初期段階のテスト1とテスト2では、学習者が実際の生活で遭遇する場面をロールプレイとして2つ設定した。ロールプレイは学習者同士ではなく、テストである教師が遭遇する場面の面接官・警官役を担当し、自分の意志や会話の目的を果たせることができるかどうかを測るものとした。

##### 4.2 ゲストセッション

テスト3ではさらに、待遇表現や日本人宅を訪問する課を学習したあと、年上の方との初対面会話状況を設定し、ロールプレイではなく、より真正性のある場面を創出するため、日本人ゲスト5名を迎え、5つのグループに1名ずつ配置した。学習者のグループは3人のグループが4つ、2名のグループが1つで、組み合わせは当日教師が指定した。ゲストの入れ替えは同時に行ない、各セッション、15分から20分のトークセッションを5回実施した。ゲストは女性2名、男性3名で学習者はすべてのゲストと話す機会が与えられた。教師はファシリテーターとして、タイムキーパーになり、ゲストの入れ替わりがスムーズに行くように促した。録音する回を評価対象とすることをゲストにも承諾を得て、学習者にも予告した。すべてのグループが5回目を評価対象とすることを希望したため、最後の回をテストの回として開始前に告知し、ICレコーダーを設置した。評価はその場ではなく、録音を聞き直して行なった。ゲストセッションでは、学習者が準備してきた質問用紙を見ることを許可し、ゲスト、学習者の双方にメモのための用紙を配布した。

また、このOralテストはエッセイテストとも連動させ、印象に残ったゲスト1名を選び、その人物について印象に残った理由とその会話内容について書かせた。

表2 全5回のOralテストの構成

テスト実施順と該当課	形式	内容	備考
テスト1 (L.1-L.3)	ロールプレイ (対教師)	TA応募の面接	教師は面接官、学習者はTAに応募した学生
テスト2 (L.4-L.6)	ロールプレイ (対教師)	落とし物の説明	教師は交番の警官、学習者は落とし物をした学生
テスト3 (L.7-L.9)	ゲストセッション	年上の方との初対面会話	1グループ3人に対して日本人ゲスト各1名。ゲストは5名で、5グループを20分ずつでローテーション。5巡目の回を録音、採点対象とした。
テスト4 (L.10-L.12)	ポスター発表	冬休み時に課題としてアンケートインタビューを実施させ、結果内容をポスター発表。アンケート内容は例えば、「アウトドアなら山派か海派か」などのトピックを設定して、回答と選択理由を聞く。	個人発表。発表セッションは4つに分け、各セッションの中で3人発表者がいた場合、発表者は教室の3壁面を使って同時に発表を行ない、5分の発表を聴衆（発表者以外の学習者）を入れ替えて、3回繰り返す。（同時発表者が4人の場合は4回）教師が聞きに入った発表回の5分を採点対象とする。延長はなし。
テスト5 (L.13-L.15)	プレゼンテーション	ニュース発表	個人発表で1名ずつプレゼンテーションスライドを用いて発表。質疑応答までを採点対象とした。

### 4.3 ポスター発表

テスト4ではアカデミックな発表形式の第一段階として、ポスター発表を設定した。「アウトドアなら山派か海派か」など、各自興味のある話題に関する2つの選択肢を設定し、回答者に選択肢のどちらに属するかとその理由を聞くアンケートインタビューを実施、結果内容について報告する形をとった。アンケートインタビューは、すべて授業時間外の活動とし、冬休み中に最低10人の実施を課した。アンケートのし方や、発表のためのまとめ、ポスターについては、モデルを提示し、アンケート書き込み用紙とともに配布した。発表準備も宿題とし、授業内での指導は行なわなかった。また、発表の形式としては、より聞き手との距離が近く短時間で複数回繰り返し可能なポスター発表形式とした。教室プレゼンテーションの場合、発表者に与えられるのは1回の発表時間のみであるのに対し、ポスター発表では少なくとも3回以上の発表の機会が与えられる。

テスト3と同様、このOralテストもエッセイテストと連動させ、印象に残ったクラスメートの発表を1つ選ばせ、それについて、発表内容と聞いた感想について書かせた。

### 4.4 プレゼンテーション

『できる日本語 初中級』の第15課のトピックは「気になるニュース」で、学習目標は「日々の生活の中で気になるニュースや事柄について、自分なりに疑問を持って調べ考えたことを周りの人に伝えて、やりとりすることができる」であった。第15課のスマールトピック1は「発表の準備」、スマールトピック2は「みんなの前で発表」である。そのため、テスト5は学期の集大成としてニュースのプレゼンテーションを設定し、アカデミックジャパニーズへの橋渡しになるものとした。前述のポスター発表と同じように、課題提示時にスライド例、発表モデルを示した。予告は他のOralテスト同様2授業日前にし、準備のための指導などはスケジュールに組み込まなかった。

## 5. インタビューに見られる学習者の受け止め方

学期終了後、4名<sup>注2</sup>の学習者にインタビューを実施した。インタビューは日本語、あるいは英語で行った<sup>注3</sup>。授業全般についての聞き取りを行なったが、以

下にOralテストに関する反応をテストの形式ごとに抜粋する。英語での回答は日本語に訳した。

### 5.1 ロールプレイ

- ・ロールプレイは本当に簡単だった。ただ文を3つ覚えていくだけでパスした。(学習者A)
- ・もちろんリアルじゃない面接だから。(中略)ロールプレイはよかったけど、1分、2分、短い。(学習者B)
- ・ロールプレイは文を暗記すれば済む。(学習者C)
- ・これはただテスト。(学習者D)

### 5.2 ゲストセッション

- ・ゲストセッションで敬語を使うのが一番難しかった。4人のゲストと話せたのはよかった。4回目には慣れてきた。試験だったから、機会が多いのはいいと思う。年上の人と初めて敬語を使う機会だった。(学習者A)
- ・難しかったです。この教科書は簡単なトピックがあります。でも、そんなインタビューはときどき、めずらしい、難しい(ゲストとの話は)話したことがないトピックもあり、わからなかったこともありました。(中略)(敬語は)してみましたけど、よく忘れえました。敬語は知っているけど、覚えません。1人より、グループのほうがよかったと思います。(学習者B)
- ・ゲストインタビューがよかった。日常の会話だから。ロールプレイは文を暗記すれば済む話だが、ゲストと話すのは暗記の会話ではない。(中略)謙譲語と尊敬語はととてもとても難しかった。(中略)このゲストセッションの会話はグループカンパセションだったのがまたよかった。一対一だと常に何か話していなければならない。(学習者C)
- ・緊張した。あまり質問できなかった。質問を考え、敬語を考えているうちに話が進んでしまった<sup>注4</sup>。話の内容はだいたいわかった。敬語は難しかった。敬語は前に習ったことがあるが、ほんの少し。知っているのと使うのはまた全然別の話。(学習者D)

### 5.3 ポスター発表

- ・アンケート調査のためのインタビューをするのはおもしろかったが、発表のときはどうして複数回するかと思った。5回目のOralテストがプレゼンター



ションだと聞いたとき、4回目のポスター発表はテスト5のための準備なのだと納得した。質問をしやすなのは4回目のポスター発表だった。質問するとき、他の人を気にすることがなくていいから。1回目はたしかに緊張するからあまり話せなかったが、最後のものは発音がもっと慣れていった感じで上手になったと思う。繰り返しは2回でも十分で、自分にとっては2回目と4回目（の上達）は同じぐらいじゃないかと思う。どうしてパワーポイントで作ったものをわざわざ紙に印刷するのだろうと思った。（中略）インタビュー相手は知っている日本人に日本語で聞いた。（中略）ポスター発表は質問しやすかった。（学習者A）

- ・よかったです。そして、（発表の時）クラスメートの質問を聞いて、速く考えなければなりません。インタビューはだいたい他の日本人学生にしました。知っている人か、知っている人が知っている人に聞きました。日本語で聞きました。（中略）はじめより、10人目が上手になった。ポスター発表は3回やると、同じ答えをあげますから、速く、速く、速く、クイックリスポンスになりました。（中略）1回目は間違ったり、知らなかったことばがあったり、2回目からは話せます。（学習者B）
- ・アンケートインタビューは対面だけでなく、高校の時の交換留学生の日本人の友達にテレビ電話をして聞いたりした。（中略）発表部分については非常にストレスだった。なぜかという、どんな質問をされるかがわからないから。それが、この活動のよい部分だということも理解はできるが。（中略）発表は1回では十分ではないが、2回で十分だと思う。（学習者C）
- ・ポスター発表がよかった。トピックを自分で決めて、日本人にアンケートインタビューしたのもよかった。図書館の前で、知らない人にインタビューもチャレンジした。忙しいから、インタビューをしたくないからと断られることもあった。聞いた人の半分ぐらいが応じてくれた。もし、このインタビューが宿題でなかったらきっと知り合いだと話していたと思う。（中略）発表部分については3回（複数回）発表できるのがよい。1回目は緊張する。2回ぐらいがよいが、何回でもよい。質疑応答の練習にもなる。ニュースの発表よりポスターのほうがよかった。それはインタビューがあったからだ。自

分の発表も楽しかったし、他の人の発表が聞けたのもよかった。（学習者D）

#### 5.4 プレゼンテーション

- ・プレゼンテーションは恥ずかしかった。あるクラスメートは聞いているふりだけで、右から左の感じだったが、ドイツ人のクラスメートはまじめに聞いてくれていた。（中略）ニュースのものはことばが難しかったんです。それでもっと（準備に）時間がかかったと思います。（中略）（発表は）発表する人数も多くて、質問は少なかった。（学習者A）
- ・日本に来る前は日本語で発表したことがありません。英語ではありましたが、これが日本語では初めてです。（中略）選ぶトピックの発表を書くのは習った文法を使います。新しい文法を習わないで前に習った文法を使ういい機会。（学習者B）
- ・たしか、1日で準備しなければならなかったと記憶している。トピックを選んで、トピックについて覚えていった。準備の時間がなかったということと矛盾しているが、準備の時間があつたら、スクリプトを覚えたりとしっかり準備しなければならなかったので、この方法でもよかったかも。「テスト」では別の能力を測っていると思うから。（学習者C）
- ・語彙が難しかった。（中略）単語が難しすぎてあまり覚えていない。（もしもう1度やるとしたらという質問に対して）ニュース発表。自発的発話、会話につながるから。（学習者D）

### 6. 学習者のインタビュー及び教師観察からの考察

テストの形式1～5まで順番に考察していく。

#### 6.1 ロールプレイ

ロールプレイテストは暗記したフレーズを言うだけで簡単すぎる、短いという点がインタビューした学習者には評価されていなかった。インタビューをした学習者以外からも、テストの準備を十分していったのに、簡単なやりとりで終わってしまい、実力を測られたように感じられなかったというコメントも授業中にあった。この授業のOralテストの目標は難易度の低いものから高いものに移行するように設計してあるので、これらの学習者の反応は想定内ではあるが、今後、学習者の意見を反映して、場面設定や学習者の自発的

な発話を促すよう質問を工夫するなど、ロールプレイ自体への再考の必要性が感じられた。

## 6.2 ゲストセッション

ゲストセッションは学習者に大変好評であった。テスト終了直後、学習者からは、テストにもかかわらず、よい経験になった、楽しかったという声が聞かれた。5.2のインタビュー実施の学習者は違うゲストと4回話した後、5回目の本番に挑めたのでしっかり試験の準備ができてよかったと話していた。ゲストセッションは従来、学ぶと言うよりはゲストと楽しく話せばよいと捉えられがちであったが、Oralテストにすることで真剣に取り組んだ様子が窺えた。また、話した内容をエッセイにするという課題が与えられたため、メモを取ったり、何度も質問して確認する姿も観察された。ゲストに同年代の日本人学生を呼ぶのではなく、初対面の年上の方を迎えることで、敬語を使うことに必然性が生まれ、筋書きがない会話から、ロールプレイにはない真正性の会話を生じさせることができたと考えられる。

アウトプット面では5.2の学習者への聞き取りインタビューでは敬語を使うのに苦労したという声が多かったが、学習者2、3人のグループだったので話が滞らずよい話し合いができたと話している学習者もいた。一方、他の学習者に押されて思うように発言できなかった学習者もいた。今後、質問を事前に学習者に考えさせると同時に自分の考えた質問を敬語で言える練習もするなど表現面での支援を組み込みたい。また、一対一の対面型の形式にしなかったことで、心理面の安全性が保たれたこと、協調して話を進める学びの機会にもなったようだ。

## 6.3 ポスター発表

ポスター発表は発表自体と、それに至るまでのアンケートインタビューで課題が構成される。アンケートインタビューをすることによってロールプレイではない、教室外での真の自然な会話を体験することによって自信が得られたようだ。普段教室内では積極的な発言が少ない学習者Dは知り合いの日本人だけではなく、図書館の前で知らない人に勇気を出して聞いた、授業の課題としてインタビューがなかったら自分から日本語で知らない人に話しかけることはないのいい機会が与えられてよかったと述べた。また、今回、聞

き取り調査を行わなかった学習者の中にもオンラインや、空港で面識のない日本人にインタビューをするなど個々の学習者が工夫し真面目に取り組んでいたことも窺われた。

今学期の受講者は学部生が多く、まだ学会で発表した経験がない学習者も多かった。従って、ポスター発表自体を経験したことがなく、事前に詳しくポスター発表の仕方について説明があったにもかかわらず、よくわからないまま準備をし、発表をしていたようである。しかしながら、ポスター発表後、質問をしやすい、また、発表を重ねるごとに発表と質疑応答に慣れて上手になっていく、即時応答できるようになったのを実感したというコメントがあった。

ポスター発表形式は聞き手が入れ替わることで、発表の繰り返しの真正性を持たせられ、また、繰り返すことで、初回の失敗が次の発表ですぐ修正可能なため、自己モニターあるいは他者の指摘を受けての改善がすぐ行なわれる。実際に、発表を重ねるほど熟達度が上がったことが教師側からも観察された。発表の回数に関しては4回を負担に感じる学習者もいたため、今後2～3回を目安にグループを構成することを検討したい。

## 6.4 プレゼンテーション

母語でのプレゼンテーションの経験はあるが、日本語でのプレゼンテーションは初めてだと言う学習者がいた。準備段階では、発表のモデルを示したが、授業内での指導は行なわず宿題としたため、準備不足に言及する学習者もいた。今後は、準備のための時間を授業内でも作るようにしたい。また、プレゼンテーションのトピックは国のニュースであったので、語彙が難しかったとの声もあったことから、プレゼンテーションでの語彙の扱い方を検討する必要もあると考えられる。プレゼンテーションは緊張し、ストレスだという学習者もいたが、もしもう一度するなら何をしたいかという質問に対して、プレゼンテーションを学期中に1度ではなく2度したかったと答えた学習者もいた。学期の初めにOralテストとしてではなくエッセイの発表を教室発表の形式にすると予告をしたところ、全員の前で発表するほうがいいという学習者は少数で、拒否反応と困惑を示す学習者のほうが多数派だった。しかしながらOralテスト5では肯定的に捉えられ、自分が得意なメディアを使って臨みたいという意欲的な

学習者も見受けられた。

## 7. おわりに

Oral テストに種々の形式と内容を段階的に取り込むことで、実生活の中でのコミュニケーションができる運用能力育成とともにアカデミックな発表力、口頭表現能力を養う試みについて報告した。学習者インタビューから、それぞれの Oral テストの形式で難易度や難しいと感じた箇所が違うことが明らかになり、学習者それぞれ自分の弱点を種々のテスト形式で見えてきたことは今回の取り組みの成果の一つだと考えられる。種々の形式で Oral テストを構成したことについては、学期末に行なった授業アンケートにも「I liked the variety of the speaking tests. (スピーキングテストのタイプがいろいろなのがよかった)」(自由記述) という回答もあった。また、簡単なロールプレイ、グループでの会話、対少数のプレゼンテーション、対多数のプレゼンテーションと段階を経ることにより自信がつくと同時に、向上心も培われてきたことが窺われる。最終の Oral テストであるプレゼンテーションはニュース発表であったが、学習者はアカデミックな発表を抵抗なく自発的に取り組み、目標を達成できたと言えるのではないと思われる。

2018年度は動的にテストを決定していったため、学期当初には学習者に表2のような全体像を示すことができなかった。今後はシラバスで Oral テストの全体像を示すことで、学期を通しての学習者の到達目標を

可視化し、実生活・大学生生活のなかで「できる」ことを個々の目標につなげていくことを学習者・教師ともに共有していきたい。

### 注

注1 エッセイテストの後は、提出者から順番に多読の読解活動を実施した。学習者は好きな読み物を選び、簡単な内容まとめと一口感想を読書ノートに記入した。3課毎のテストで読解のテストは行なっていない。

注2 2018年度後期の初中級クラス受講者14名のうち、2019年度も在籍し、継続して日本語クラス(中級前半)を受講した4名にのみ初中級の授業について、追跡インタビューが可能であった。

注3 2名が日本語で回答、2名が英語で回答を行なった。

注4 教師観察、また録音回では学習者Dの属した3人グループでは、学習者D以外の2人が主に話していた。

### 参考文献

嶋田和子監修 (2012) 『できる日本語 初中級』アルク

嶋田和子 (2019) 「『つながり』を重視した『できる日本語』—学習者も教師も『わくわくする授業』をめざして」『日本語の教科書がめざすもの』凡人社 pp.47-56



## 平成30年度国際言語センター公開講座

### 「日本語学習支援を始めよう!! 日本語パートナー講座」

衣 川 隆 生

#### 1. はじめに

国際言語センターでは、日本語学習支援ボランティア組織「さくらの会」との共催で平成25年度から公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」を開催してきた。「さくらの会」は、旧留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年4月から活動を継続している日本語学習支援ボランティア組織であり、「教える」という言葉にとらわれず、「日本語で話そう」を合言葉に「ことば」から「対話」へと広げていく活動を国際言語センターを中心として週2回行っている。

平成29年度に引き続き、平成30年度においても日本語学習支援の対象者を留学生に限定せず、地域に在住、在勤の外国人を対象とした日本語学習支援を取り上げ「日本語学習支援を始めよう!! 日本語パートナー講座」という題目で公開講座を開催した。

#### 2. 講座の概要

講座は11月7日、21日、28日、12月5日の水曜日に4回実施された。時間は、14時45分から16時15分までの90分である。以下、概要を紹介する。

##### 第1回「大学と地域の国際化」

- 1) 文部科学省が進めている日本の大学の国際化施策、名古屋大学の国際化プラン、留学生数やその割合、出身地域などの現状について
- 2) 留学生に求められる日本語とは  
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」の分類と内容
- 3) 愛知県の外国人県民の現状・「あいち多文化共生推進プラン2013-2017」・「愛知県 多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」について

##### 第2回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

- 1) 「お気に入りの場所（うち・お店・公園・職場など）を紹介する」という対話活動の体験
  - 2) 体験活動のふりかえり
- ##### 第3回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」
- 1) 狭義の日本語教育と広義の日本語教育の差について
  - 2) 対話と協働とは？
  - 3) 新たな学習観について

##### 第4回「具体的な活動を知ろう」

対話型の活動の原則＝ここに気をつけよう

#### 3. 受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンターなどにおけるチラシ配布、新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ17名から申し込みがあった。その後1名受講キャンセルが出たため、最終的には16名の受講者で講座を開始した。何らかの形で外国人に対するボランティア活動をしている方も多かったが、ボランティア自体が初めてという参加者も3人に1人の割合であった。16名中11名が4回全てに出席し、5名が3回出席であった。また、終了時には15名からアンケートを回収することができた。以下、アンケートの結果を検討する。

まずこの講座についてどこで知ったかについては「新聞広告」が8名で最も多く、次いで「チラシ」が5名、「友人から」が2名であった。新聞広告を利用して広報活動を行っているが、その効果は非常に高いことがわかる。

「受講の目的、期待」については、「外国人・留学生との交流」「ボランティア」に興味があったからそのきっかけ作りに、という回答が多かった。また「困っている外国人の方の何らかの役に立ちたい」という回答も多く寄せられた。次に「講座の内容が目的、期待に合ったものであったか」という質問に対しては、ほ

とんどの人から「期待通りであり、今後自分の実践に役立てたい」という肯定的な回答が得られた。「コミュニケーションの重要性が理解できた」「言葉が通じるコミュニケーションのあり方の参考になった」「日本語の話し方を考え直しました」という回答もあった。

これらの回答からも参加者にとっては「教える」という言葉にとらわれず、「日本語で話そう」を合言葉に「ことば」から「対話」へと広げていく活動を中心としていく日本語学習支援のあり方を考える一助になったのではないかと考えられる。

—平成29年度国際言語センター公開講座—

**日本語学習支援を始めよう!!**

**日本語パートナー講座**

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、  
日本語パートナーについて学んでみませんか。


**\*講座内容と日程**

	日 程	内 容
第1回	11月 1日(水)	大学と地域の国際化
第2回	11月 8日(水)	日本語学習の支援ってどんなこと?
第3回	11月22日(水)	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回	11月29日(水)	具体的な活動を知ろう

時間 14時45分 ~ 16時15分

場所 名古屋大学 教室未定

講師 名古屋大学国際機構国際言語センター  
教授 衣川 隆生



\*昨年と同じ内容ですので、継続の方はご連絡下さい。

-----

\*この講座は、名古屋大学国際機構国際言語センターとさくらの会の共催で行われます。  
さくらの会は2004年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。  
日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、テキストは使わないけれど  
学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、『日本語で話そう』を合言葉に  
ボランティア活動をしています。

\*会員募集を前提としたものではありません。公開講座です。



# 活動報告

---

FD 活動の報告

第78期・第79期（2018年度）日本語研修コース

第37期 上級日本語特別コース（2017年10月～2018年9月）

全学向け日本語プログラム 2018年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム 2018年度

第19期 日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

オンライン日本語コースの運営

名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2018年度実施報告



# FD 活動の報告

俵 山 雄 司

日本語・日本文化教育部門では、平成14年にFD班を設け、以後、現在に至るまで、日本語・入門講義の授業を担当する教員全員でFD活動に取り組んできた。さらに平成16年には、留学生センターの委員会としてFD委員会を設置し、教員個々の教授能力の向上、授業の改善を目指している。

今年度は、平成27年度に新たに策定した「平成28年度から32年度までのFD活動計画」の2年目にあたる。以下に概要を示す。

## 平成28年度から32年度までのFD活動計画

「成功例・要改善例の共有による教育改善」

### ①報告の執筆と共有

・年度ごとに、教員個人が1つの授業を取り上げ、そこで行った試みの成功事例（あるいは要改善となった事例）の報告を執筆する。報告はFD担当者がとりまとめ冊子にして全員に配布。

### ②口頭による報告とディスカッション

・年度ごとに担当者が報告を2つ選び、それについて、授業者に発表してもらいディスカッションの機会を設ける。

上記のサイクルは、平成29（2017）年度末に①の報告を執筆するところから開始となった。なお、平成30（2018）年度から、カリキュラムの大幅な変更があったため、新カリキュラムに基づく授業の実施報告を行い、成果と課題を記述するものも可とした。今回の報告のタイトルを、報告対象となったコース別に示す。

### 日本語研修コース（EJ）

Essay Sharingの改善、教科書NEJを用いた初級授業における電子黒板の活用、NEJを使用したコース（特にEJ）での改善について、EJ・NP初級における多読の実践

### 日本語・日本文化研修コース（AJ）

作文、精読授業の一事例、総合演習における試みと改善

### NUPACE向け日本語コース（NP）

NP1ナラティブ紙芝居改定の試み、NP1におけるリードアラウドの実施順、NP3クラスのポスター発表、NP4視聴解—ピアリーディング、NP4読解表現—読解から読解表現へ—、NP5視聴解表現、NP7研究発表の活動と改善点、NP7読解表現でのピア・レスポンス、NP8視聴解表現授業報告、NP8読解表現における読解後の発表

### 全学向け日本語コース（SJ）

SJ110のディクテーション、2018年度の初中級SJ220、SJ310聴解クラスでの試み、SJ330会話におけるグループ活動及び自己評価・他者評価の試み、漢字Ⅱのフラッシュカード、漢字Ⅲ（漢字1000レベル）授業の試み、総合日本語Ⅰにおけるラジオドラマ制作の試み

### 学部留学生を対象とする言語文化科目

学部上級日本語（文章表現）における作文教育

### 入門講義

入門講義「日本文学Ⅰ」—近代文学作品の選択—、入門講義「日本文化論Ⅰ」新テーマ導入の試み

次に、②の口頭による報告とディスカッションであるが、前年度2017年度末に提出された①の報告から2つを選んで、研修会として実施した。詳細を以下に示す。

#### (1)

日時：12月19日（水）午後1時～1時30分

場所：アジア法交流館日本語演習室2

話題提供者：西田瑞生

タイトル：口頭表現と文章表現のクロスオーバー

内容：日本語Ⅱ（理系学部1年生対象・口頭表現）におけるプレゼンテーションにおいて実施した取り組みについて報告した。具体的には、プレゼンテーションの聴衆は、それを聞いて、質問をしたり、感想を言ったりするだけでなく、プレゼンテーションで聞いたことなどをもとに作文をする活動であった。

(2)

日時：12月19日（水）午後1時30分～2時

場所：アジア法交流館日本語演習室2

話題提供者：石崎俊子

タイトル：Quizlet を利用した漢字学習

内容：Quizlet というオンラインの学習ツールを利用した漢字学習について紹介した。無料で利用でき、また、他の利用者が作ったクイズも利用できたり、エクセルからデータをインポートできたりすることを、実際に画面を見ながら説明した。

この研修会には、国際言語センターの専任教員及び非常勤講師合わせて約20名が出席し、活発な質疑応答や議論が行われた。

## 第78期・第79期（2018年度）日本語研修コース

衣川隆生・佐藤弘毅

### 1. コース概要

国際言語センターでは、国費留学生対象の初級特別コース、日本語・日本文化研修コースの配置人数の減少に対応するため、2018年度より同コースにNUPACE生を受け入れられるよう体制を変更し、また初級特別コースにおいては1日3コマ週15コマ、15週週間のコースから、1日2コマ、週10時間、15週間のコースとすることとした。第78、79期はこの体制による初年度の日本語研修コースである。

### 2. 研修生

第78期日本語研修コースの受講生はすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり、合計32名であった。その内訳は国際開発10名、情報系6名、理学、工学、教育学各3名、農学、環境学各2名、人文学1名であり、全員が名古屋大学大学院に進学予定であった。その出身国は24ヶ国であった。第76期より、受講生の来日前に日本語研修コース修了後に指導予定の教員と連絡を密にとり、大学院入学試験の時期やその準備に必要な時間数、ゼミ出席の頻度などを聞き取り、その結果を参考にして、初級特別日本語コースを受講するか、1日1コマ、週5コマの短期留学生を対象としたNPコース、または週3コマの全学向けコースを受講するかを決定した。その結果、16名の学生がNPコースを、1名が全学向け日本語コースを受講することとなり、残りの16名が初級特別日本語コースを受講することとなった。

第79期日本語研修コースの受講生もすべて文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生であり、合計12名であった。このうち4名が名古屋大学に進学予定の研究留学生であり、その内訳は人文学3名、教育学1名であった。それ以外の8名が6ヶ月の研修終了後愛知教育大学で研修を続ける教員研修生であった。その出身国は11ヶ国であった。第78期と同様指導予定

の教員と連絡をとり、受講コースの選択を行った。その結果、7名がNPコースを、残りの4名が初級特別日本語コースを受講することとなった。この4名は全て研修終了後愛知教育大学で研修を続ける教員研修生である。また、1名は来日が遅れたため、チューターによるキャッチアップレッスンを受講後、全学向け日本語コースの初級1を受講することとなった。

以下、初級特別日本語コースのクラス編成、内容について報告する。

### 3. クラス編成

授業は、第78期においては8名ずつの2クラス編成とし、第79期においては4名による1クラス編成とした。専任教員2名、非常勤講師5名の計7名が担当した。

### 4. 時間割と日程

第78期においては4月11日から7月30日まで15週間の授業を行い、夏休みを挟んで9月に修了式を実施するという日程とした。第79期においては10月2日から2月6日まで15週間の授業を行い、3月に修了式を実施するという日程とした。

授業は月曜日から金曜日まで、午前8時45分から12時00分まで90分授業を2コマ行った。開講式の前に到着時のオリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、名古屋大学での日本語教育の全体像及び日本語研修コースの概要を説明し、その後、未習者には学習背景アンケート、既習者にはプレースメントテストおよびインタビュー、さらに学習背景アンケートも行った。

### 5. カリキュラム

第78期より日本語プログラム及びカリキュラム改革



を実施し、主教材はこれまで使用していた A Course in Modern Japanese (Revised Edition), Vols. 1 & 2 (名古屋大学日本語教育研究グループ編) から、A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE, Vols. 1 and 2 (西口光一著) に変更した。学習活動を大きく課外学習と教室内学習に分け、教室内学習はさらに評価対象活動と活動に分類し、それらが視覚的に理解できるようにスケジュールを作成、配布した。

各ユニットの基本的な流れは以下の通りである。まず、各ユニットに入る前日に「目標の確認・マスターテキストの把握 (Goal Description/Grasping the Master text)」を組み込み、それに基づいて「セクション 1 の聞き取りと理解 (Listening/Understanding Section 1)」を課外学習として行う。各ユニットでは最初に「Section 1」スライドを利用してマスターテキストの内容を理解し、その内容についての質疑応答、マスターテキストのシャドーイングを行った。また、「Grammar Practice Sheets」「Writing Practice Sheet」は活動日をずらして教室活動として紹介、確認し課外学習として復習することを求めた。さらに「Useful Expressions」「文法の概要 (The Gist of Japanese Grammar)」等も必要に応じて適宜教室活動として組み込んだ。この授業活動後、課外学習として「音読練習 (Section 1 Read aloud Practice)」を課し、教室での評価対象活動として「Section 1 Read aloud」「Grammar Practice Sheets クイズ」「Writing Practice Sheets クイズ」を行った。また、各ユニットのテーマ、マスターテキストを参考に「作文 (Essay Writing)」を書き、それを教室活動で「作文の自己修正 (Essay Correcting)」「作文の共有 (Essay Sharing (Read aloud))」を行った。表 1 にユニット 8 のスケジュール事例を示す。下線を伏した部分がユニット 8 である。ここまで説明したユニットの流れをそのままスケジュールに組み込むのではなく、前後のユニットと並行して進むスケジュールとしている。

また、Unit 1-3で「自己紹介・家族紹介」、Unit 4-6で「日本での生活」のように、テーマとしてまとめられるところで作文をまとめ発表する時間 (Show & Tell, Presentation) を10回評価対象活動として組み込んだ。

終了時には、修了アンケートを実施した。

専門と日本語学習の両立についての質問に対しては、これまでと同様第78期は「入試準備」「専門との両立」が大変で特に後半では日本語学習に集中できなかったという回答が半数から寄せられた。一方第79期の受講生は教員研修の学生だけであったため、このような問題は提出されなかった。前期は受け入れ人数も多くそのほとんどが大学院入試を控えているのに対して、後期は教員研修留學生がその大半を占めるという状況が続いている。前期にはコース途中に入試が実施される研究科も多く、また、8、9月の入試であっても、事前に研究計画書等を準備しなければならないため、それに時間を取られる学生が多い。この背景がカリキュラム、教育内容についての回答にも反映しているようである。

第78期では、「目標の確認・マスターテキストの把握」「セクション 1 の聞き取りと理解」「Section 1」は、欠席した場合の自習が困難であるので、自習の方法を示してほしい、という意見が複数の学生から提示されたが、第79期においてはそれらの活動が適切であるという回答のみであった。また「音読練習と音読チェック」についても第78期と第79期では評価が分かれている。第78期では効果的であるというコメントと「あまりよくなかった」という回答がほぼ半々であったが、第79期は効果的であったというコメントが多かった。「Grammar Practice Sheets」「Grammar Practice Sheets クイズ」に関しては、繰り返しが多く、効果を感じないという回答が多かった。今後は、これらの回答も参考にしながら、カリキュラム、教室活動、評価対象活動を再検討していく必要があるだろう。

表1 スケジュール事例

Date	PERIOD 1	PERIOD 2	課題活動
11月5日(月)	○ Unit 7	○ Unit 7  ○ Unit 8 <u>Goal Description</u> <u>Grasping Master Text</u>	○ Unit 7 Writing Practice Sheets ○ Show & Tell Unit 4-6 ○ Unit 8 <u>Listening Section 1-1</u>
11月6日(火)	○ Unit 8 <u>Section 1-1</u>	○ Unit 8 <u>Section 1-2</u>	○ Unit 8 <u>Listening Section 1-2</u>
11月7日(水)	○ Unit 7 ● Writing Practice Sheets クイズ Section 4 Verb Inflection ① Show & Tell Unit 4-6	○ Unit 8 <u>Section 2 Useful Expressions</u> <u>Section 3 Additional Practice</u> *Grammar Practice Sheets	○ Unit 8 ・ <u>Section 1 Read aloud Practice</u> ・ Grammar Practice Sheets
11月8日(木)	○ Unit 8 ● Section 1 Read aloud *Writing Practice Sheet	○ Unit 8 ● Grammar Practice Sheets-Quiz <u>Essay Writing</u>  ○ Unit 9 Goal Description Grasping Master Text The Gist of Japanese Grammar	○ Unit 9 ・ Listening Section 1 A-1・2/ Section 1 B-1・2
11月9日(金)	○ Unit 9 Section 1 A-1	○ Unit 9 Section 1 A-2 Section 2 Useful Expressions 1/2	
11月12日(月)	○ Unit 9 Section 1 B-1	○ Unit 9 Section 1 B-2 The Gist of Japanese Grammar	○ Unit 8 ・ Writing Practice Sheets
11月13日(火)	○ Unit 8 ● Writing Practice Sheets クイズ <u>Essay Correcting</u> <u>Essay Sharing (Read aloud)</u>	○ Unit 9 Section 3 Verb Inflection 2 *Grammar Practice Sheets	○ Unit 9 ・ Grammar Practice Sheets ・ Section 1 Read aloud Practice

## 第37期 上級日本語特別コース (2017年10月～2018年9月)

永 澤 清

第37期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得(話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって)」「日本に関する基礎的理解」「基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行った。

学習者は、11カ国、21名(インドネシア:4名、ポーランド4名、中国3名、タイ:2名、ハンガリー:2名、ウクライナ:1名、韓国:1名、スリランカ:1名、フィンランド1名、ブラジル:1名、ペルー:1名)であった。また、7名の教員が指導に当たった。以下、主要なプログラムについて概説する。

### (1) 教科書による日本語学習(10月～4月)

『名古屋大学 日本語コース中級Ⅰ』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅱ』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『名古屋大学 日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』(以上、名古屋大学日本語教育研究グループ編)を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト(既習事項の確認)」「復習クイズ(各課の復讐)」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト(筆記テストおよび話すテスト)を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

### (2) 応用会話(10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力(表現力、運用能力)を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを使用した。

### (3) 入門講義(10月～7月)

「日本に関する基礎的理解」「基礎的な研究方法の習得」を狙いとして、10月～2月(前期)および4月～7月(後期)の期間、前期4科目、後期3科目の入門講義を14回(各90分)行った。前期の開講科目は「日本文化論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」、

後期は「日本文化論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は、前期は4科目のうち3科目以上を選択、後期は3科目のうち2科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

### (4) 作文(レポートのための基礎訓練)(1月～5月)

大学での文章執筆に必要な基礎知識を身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立つ表現」「引用の仕方」などについて学習した。

### (5) 読解(10月～4月)

読解として、「精読」(教科書の読解教材に代わるもの)、「新聞読解」、「問題付き読解」(生教材に読解の手助けとなる問題を付したのもの)、「本の読解」(エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択)、「特別読解」(学習者が、新聞などから自分で記事を見つけ、授業でも教師役をする)などを行った。

### (6) 上級文法・語彙(兼N1対策)(10月～4月)

上級レベルの文法・語彙の練習問題(18回分)を作成し、使用した。これは、日本語能力試験(N1)の準備を兼ねるものである。

### (7) 漢字テスト・漢字コンクール(10月～7月)

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」(20回)を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」(4回)を実施した。

### (8) スピーチ(10月～7月)

自国の紹介、本や映画の紹介、ふだん考えていること等のトピックについて、スピーチを行った(1人、

1回、5分程度、スピーチ後に質疑応答／数回実施)。

### (9) ディベート (5月)

教科書での学習 (賛成・反対意見を述べる) の応用として、学生が決めたテーマでディベートを行った。論点を明確に述べる、他者の意見を取り入れながら自らの意見を深める、討論に必要な表現を身につけることを主な目的とした。

### (10) 総合演習 (12月／5月～7月)

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、前期と後期の両学期に総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。テーマは以下の通りである。

前期：「名古屋の名物について知ろう」(1週間)

後期：「ことばと遊び」(1週間)、「やきもの」(3週間)

### (11) 文章表現 (4月～7月)

#### ① レポート

アカデミックライティングや情報探索の基礎を学ぶことを目的に、各自「好きなもの」に関してテーマを設定し、口頭発表を経てレポートを作成した。

#### 〈タイトル一覧〉

サルミアッキ／日本の化粧品／仮想の歌手ボーカロイド、歴史と分類／ヒトビトの中の間人達／表現法の多様性—日本の代表的な踊りの紹介／タイ伝統菓子／日本の自然／バラエティ番組について／ウルトラシリーズ52年の歴史—時代の背景を知る／“時代”を描いた作家、山田風太郎／デジタル時代における手書きについて—手帳を中心に／和菓子／日本の着物／ビジュアルノベルの歴史と分類／ポケットモンスター／名古屋めしの特徴／すし／日本のライブハウス文化／ポーランド料理／日本のアニメ／日本のおもてなし

#### ② エッセイ

留学の集大成として自己を見つめ、思い出を書き残

すことを目的に800字程度のエッセイを執筆した。限られた字数の中でテーマを絞って書くことを意識化し、レポートと異なるスタイルの文章表現を学んだ。

#### 〈タイトル一覧〉

今ここに／人生で貴重なもの／それぞれの人生／定食とコーヒー／木の葉のように／この10か月間を振り返って／道／十か月を振り返って、私の思い／刻まれた思い出／季節ガタリ ウタ巡り／雨上がり／留学の匂い／一人暮らしって／かけがえない記憶／日本での物語／はし／液体的な理解／運命を信じるようになった一年／家族／ギフト／次、止まります

### (12) その他

以上に加えて、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

### (13) アンケート

2018年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関する詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問についての回答である。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	1人	10人	10人

### (14) 今後に向けて

学生は様々な課題・活動に熱心に取り組み、成果を挙げた。本コース所属の学生は、コース開始時点ですでに高度な日本語運用力をもっている。その力をさらに確固たるものとするにより、日本社会・伝統文化・歴史・文学・経済・科学技術・地域社会等について実地に学び、経験し、視野を広げてほしいと願っている。そのための取り組みとして、「日本語」を標榜する本コースは、第一に文法・語彙力の充実を図りたい。第二に日本語を通して、学問の基礎となる広い視野と多角的な分析力を養いたい。

## 全学向け日本語プログラム 2018年度

李 澤 熊

全学向け日本語プログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生活に必要なとされる日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2018年度は既存の日本語プログラムを見直し、効率を図るべく新体制でのコース運営となった。概要は次の通りである。

### 1. 2018年度の概要

1) 全学向け日本語プログラムは、現在、NUPACE生、研究生、正規生を主な対象としたプログラムであるが、研究生、正規生は専門の勉強が優先になっているということもあり、受講者の半数以上が途中でドロップアウトしているのが現状である。そこで、研究生、正規生を主な対象とした週3コマのコースを開講し、大きな負担にならない程度に、できるだけコース終了時まで続けられるようなコース設計をした。また、日本語で研究を進めなければならない名古屋大学人文学研究科の研究生受け入れ基準が「日本語能力試験N2以上」ということを考慮

し、N1、N2レベルの上級コースは設けなかった。但し、「総合日本語」という形で、5限、6限に上級者向けの授業は開講した。なお、今まで、週10コマの集中コースと週5コマの標準コースを開設してきたが、NUPACE専用のコースとして週5コマのコースのみを新設し、週10コマの集中コースは廃止した。

- 2) 例年と同様、初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し、日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。なお、クラス分けテストはJ-CAT(インターネット日本語能力自動判定テスト)を用いた。
- 3) 各クラスにおいて、出席および成績の管理を行い、授業終了時に出席率および成績から合格者を発表し、合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。
- 4) 「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために、登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。
- 5) FD活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

### 2. 期間と内容

- 1) 前期開講期間：2018年4月13日(金)～7月30日(月)14週間
- 2) 後期開講期間：2018年10月12日(金)～2019年2月4日(月)14週間
- 3) 開講クラスと内容：

## 2. 1. 初級・中級コース

コース 科目	レベル	目 標	教 材
日本語 コース (Japanese)	初級 I SJ101	日本語がまったくわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活のごく身近なトピックや日本の文化に関する話しことばの運用能力を育てる。 (漢字80字, 単語数300語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol.1 &amp; CD</i>
	初級 II SJ102	初級 I 修了程度のレベルの学生を対象に、さらに基礎日本語の知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字120字, 単語数600語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol.1 &amp; CD</i>
	初級 III SJ210	初級 II 修了程度のレベルの学生を対象に、さらに日本語文法の知識を与えると同時に大学生活や日本の習慣など身近な生活場面に 関する話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字, 単語数900語)	国際言語センター 開発教材
	初中級 SJ220	初級 I, II で学んだ文法事項の運用練習を行うとともに、中級レベルで必要となる漢字力, 読解力を含め、日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字, 単語数1000語)	国際言語センター 開発教材
	中級 I SJ310	初中級修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ, 4 技能全般の運用能力を高める。(漢字300字, 単語数1200語)	国際言語センター 開発教材
	中級 II SJ320	中級 I 修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ, 大学での勉強に必要な日本語能力の基礎を固める。 (漢字400字, 単語数2000語)	国際言語センター 開発教材
	中級 III SJ330	中級 I, II で学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い, 上級レベルの日本語学習の基礎を固める。 (漢字500字, 単語数3000語)	国際言語センター 開発教材
漢字 コース (kanji)	漢字 I KJ I	漢字がほとんど分からない学生を対象に、日本語能力試験 N4 程度 の漢字250字を目標に学習する。	『(新版) BASIC KANJI BOOK —基本 漢字500—』 Vol.1
	漢字 II KJ II	漢字250字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験 N3 級 程度の漢字500字を目標に学習する。	『(新版) BASIC KANJI BOOK —基本 漢字500—』 Vol.2
	漢字 III KJ III	漢字500字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験 N2 程 度の漢字1000字を目標に学習する。	国際言語センター 開発教材
オンライン 日本語コース (Online)	オンライン漢字 OLkj	初・中レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラス を開講している。	Moodle 版日本語 教材

## 2. 2. 上級コース

※以下のコースは、日本語能力試験 N1・N2 レベル合格者が受講対象となる。

総合日本語 (Integrated Japanese)	総合日本語 I - IV IntgJ I - IV	日本語能力試験 N2 - N1 程度の日本語能力を有する学生を対象 に、時事的・準学術的な抽象度の高いトピックを取り上げ、大学で の研究に必要な口頭表現、文章表現の高度な能力を養う。	講読文献などは授業 中に適宜指示する。
漢字コース (kanji)	漢字 IV KJ IV	漢字1000字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験 N2 - N1 程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『Kanji in Context Reference Book』 [Revised Edition]
入門 講義 (introductory Lectures)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに、日本 理解を助ける科目である。入門講義科目の「I」は秋学期に、「II」は春学期に開講します。		
	日本文化論 I JCul I	この講義では、日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあ げ、受講者の出身国の事例と比較しながら、日本の社会や文化の特 徴を議論していく。取りあげるテーマは、夫婦別姓、国際結婚、い じめ、不登校、フリーターなど。	講読文献などは授業 中に適宜指示する。
日本文化論 II JCul II	日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために、韓国を比較 の対象として取りあげ、東アジアにおける「近代」(西洋文明との 出会い)の意味を考える。		



	日本語学 I JLin200 I	主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞、ボイス、テンス、人称、活用等 主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取り上げるテーマは、テンス・アスペクト、モダリティ等	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本語学 II JLin200 II		
	日本文学 I, II JLit200 I, II	日本文学史を概観した後、主に近代における日本文学(小説、随筆、短歌等)の講読を通して、表現や作品の背景を学ぶ。ジェンダーや異文化受容の視点からも日本文化を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン 日本語コース (Online)	上級読解作 OL300	中級レベルを修了した学習者を対象に、400字~600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し、文章表現能力を養う。	Moodle 版日本語教材

### 3. 受講生数

前期と後期の受講者数の内訳は以下の通りである。

	前期		後期		
	登録者数	修了者数	登録者数	修了者数	
初級 I (3クラス)	58	31	初級 I (3クラス)	106	80
初級 II (2クラス)	14	10	初級 II (2クラス)	41	24
初級 III (2クラス)	24	23	初級 III (2クラス)	25	20
初中級 (2クラス)	25	17	初中級 (2クラス)	43	27
中級 I (2クラス)	31	21	中級 I (2クラス)	21	15
中級 II (2クラス)	26	17	中級 II (2クラス)	36	22
中級 III (2クラス)	21	15	中級 III (2クラス)	42	18
漢字 I	63	35	漢字 I	70	35
漢字 II	37	23	漢字 II	48	27
漢字 III	10	6	漢字 III	10	8
漢字 IV	24	17	漢字 IV	7	6
総合日本語 I	45	31	総合日本語 I	30	28
総合日本語 II	18	10	総合日本語 II	56	33
総合日本語 III	26	10	総合日本語 III	33	15
総合日本語 IV	35	17	総合日本語 IV	12	6
日本語学	47	37	日本語学	59	27
日本文化論	61	37	日本文化論	70	34
日本文学	26	20	日本文学	60	55
Online 日本語	22	12	Online 日本語	95	30
計	613	389	計	864	510

### 4. 学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために、前期と後期に受講者を対象に、コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数は前期と後期、それぞれ62名と97名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが、各レベルに共通して尋ねた質問のうち3つの項目について報告する。

質問1：勉強したことがよく理解できたと思いますか。

質問2：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

質問3：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

## 前期

	Q 1	Q 2	合計
そう思う	43	45	72%
どちらかといえば「はい」	15	11	21%
どちらとも言えない	3	5	6%
どちらかといえば「いいえ」	1	1	1%
そう思わない	0	0	0%
回答者合計	62	62	100%

## 後期

	Q 1	Q 2	合計
そう思う	58	74	68%
どちらかといえば「はい」	21	13	18%
どちらとも言えない	13	9	11%
どちらかといえば「いいえ」	4	0	2%
そう思わない	1	1	1%
回答者合計	97	97	100%

以上の結果から分かるように、全般的に良好な評価結果が得られた。しかし、中には以下のような要望も出ており、今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

- ・宿題が多いので負担になる
- ・文法の授業がないのは残念である（文法を強化してほしい）
- ・単語（語彙）の勉強をもっとしたい
- ・論文やレポートの書き方をもっと学びたい
- ・専門の授業と重なって、とれない科目があった

## 5. 今後の課題

ここ数年、本学では国際化戦略に伴い、留学生を対象とした様々なプロジェクト型の教育が積極的に行われており、日本語教育を担っている本センターの役割はさらに重要になることが予想される。今年度は、このような状況に対応すべく既存の日本語プログラムを見直し、新体制でのコース運営となった。

しかし、留学生の多様なニーズに応えるためには、さらにプログラムの整備・充実を図る必要がある。

従来の全学向け日本語プログラムにおいては、受講生は専門の勉強が優先になっているということもあり、半数以上が途中でドロップアウトしているのが現状であった。そこで、今年度からは週3コマのコースを開講し、大きな負担にならない程度に、できるだけコース終了時まで続けられるようなコース設計で運営した。実施の結果、初級レベルを中心に効果が現れたが、中上級レベルについては依然としてコースの途中でドロップアウトしている受講生が目立つ。今後さらなるプログラムの改善に努める必要がある。また、昨年度からクラス分けテストはJ-CAT（インターネット日本語能力自動判定テスト）を用いて実施しているが、例えば十分理解できなくても正解が得られる仕組みで問題ができていることもあり、必ずしも的確に測れない面がある。今後、実施の見直しも含めて、さらに検討する必要がある。



## 学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮 葉 正 親

学部には在籍する留学生が大学で所定の単位を取得していくためには、講義を聴く、ノートをとる、ゼミで発表する、レポート・答案を書く、ディスカッションをするなど、高度な日本語運用能力が要求される。授

業ではそのための訓練を行うとともに、日本人学生や教員とのコミュニケーション能力の育成や日本社会・文化に対する理解を深めることを目的としている。

2018年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
1期（1年前期）	文系	文章表現	月3限	藤森秀美	3
		口頭表現	木3限	西田瑞生	3
	理系	文章表現	火2限	浮葉正親	6
		口頭表現	木2限	西田瑞生	6
	工学（国）	口頭表現	月2限	藤森秀美	4
		文章表現	水2限	永澤 済	4
	工学（私）	文章表現	月2限	西田瑞生	4
		口頭表現	水2限	鷺見幸美	4
2期（1年後期）	文系	文章表現	金2限	馬場典子	3
		口頭表現	木3限	西田瑞生	3
	理系	文章表現	火2限	西田瑞生	6
		口頭表現	木2限	永澤 済	6
	工学（国）	口頭表現	月2限	西田瑞生	4
		文章表現	水1限	浮葉正親	4
	工学（私）	文章表現	月2限	藤森秀美	4
		口頭表現	水1限	鷺見幸美	4
3期（2年前期）	文系	文章表現	火1限	永澤 済	5
4期（2年後期）	文系	文章表現	木1限	永澤 済	5

## クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科&コンピュータ科学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

## 授業内容

## 1年前期

## 文系・文章表現

意見レポートを書きあげることが目標に、書き言葉と話し言葉、意見レポートの表現・語彙、要約、引用を学んだ。レポートの作成は①適切なテーマを選ぶ②適切な論拠に基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書く

という手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い、コメントを元書きなおす作業を行った。

また、メールの書き方を学び、依頼、謝罪等のメールを書く練習を行った。

## 文系・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるために、構造的なわかりやすさということ

に注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグルーピング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較、対照によってわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

#### 理系・文章表現

短い文章からはじめて徐々に長い文章を書く練習を行った後で、各自がテーマを設定し、いくつかの文章を読んでまとめる最終レポートを執筆した。最終レポートについては、テーマ設定、材料集めやアウトラインの作成などを授業中の作業や宿題によって少しずつ進めていった。

#### 理系・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグルーピング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。学問の基礎である比較、対照の方法の表現も学んだ。

#### 工学系（国費）・文章表現

各回、ニュースを視聴・読解し、表現や表現法を学んだ。それをもとに要約や考察を執筆し、大学で必要な文章の基礎力を養った。多様なトピックを通して、文化、社会、科学等に関する基本的な内容を、日本語で理解し伝える総合力を養った。また、互いのレポートを読み合い、文章の構成、表現、テーマの選択等について理解を深めた。

#### 工学系（国費）・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるために、構造的なわかりやすさに注目し、それを魅力的に話す練習をした。グループで自分たちの国に関する興味のある分野をえらび、お互いの国や地域を比較、対照しながら、クラスメートにも興味を持ってもらえるようにプレゼンテーションすることを

行った。

#### 工学系（私費）・文章表現

大学生活、とくに、学会やクラスでの文章作成において必要な魅力的でしっかりした構造の文章表現ができるようになるための練習をした。いくつかのトピックを書く場合に、同じトピックのものをまとめて書くグルーピング、トピックをまとめたものを最初に書くラベリング、どの順序で書くかというオーダリングを考え、比較、対照によって文章をわかりやすく豊かにする方法も学んだ。

#### 工学系（私費）・口頭表現

1) 経験を語る3分間スピーチを行い、その録音を自分で文字化・自己評価した。自らの課題を見つけ、改善するプロセスを経験するため、一人3回ずつ行った。2) スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して、発表及び質疑応答の仕方を学んだ。テーマ設定から評価基準の設定まで協働的に活動した。3) NHKの番組「プロフェッショナル仕事の流儀」「クローズアップ現代」を視聴し、内容をまとめて話す活動を行った。

#### 1年後期

#### 文系・文章表現

前期の口頭表現で学んだことを文章に活かす練習をしながら、自らの住む名古屋の中の特定の地域をフィールドワークをして広い読者に紹介するという設定で、小雑誌を作成した。どのようなテーマを設定し、なにを取り上げるか、ということから、フィールドワークで得たものをどのように伝えるかなどをお互いに議論しながら、クラス全員でまとめたものを作成した。

#### 文系・口頭表現

「在宅勤務」「結婚」「学歴」をテーマとした新聞記事などを読んだ後、その内容を元にディスカッション・ディベート・プレゼンテーションを行った。そのうち、ディスカッション・ディベートについては動画を撮影し、各自で振り返りを行った。また、各活動の後には、「役立ちそうな表現」「自分の話し方の利点・欠点」「その活動の際に大切だと思うこと」について記述させ、学期末に総合的な振り返りを行った。

### 理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み、その中で使われる書式や表現を学習した。また、語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み、それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方、図表の作り方やその説明など、レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。

### 理系・口頭表現

前期に引き続き、談話をわかりやすくする構造的な条件を考えながら、より魅力的に話す練習をした。自分の国とフィールドワークを通して知った名古屋をグループで紹介するというところを行い、その中でディスカッションをするという練習も行った。

### 工学系（国費）・文章表現

前期に引き続き、文章をわかりやすくする構造的な条件を考えながら、より魅力的に書く練習をした。クラスメートの興味のある分野について、プレゼンテーション（とディスカッション）を聞いて、それをもとに、自らの意見や知っていることなども加えて作文をするという練習も行った。

### 工学系（国費）・口頭表現

前期の文章表現で学んだ文章をわかりやすくする構造的な条件も踏まえて、魅力的に話す練習をした。自らの興味のある分野をえらび、広く、日本との関係も考えながら、自らの文化、社会について、クラスメートにも興味を持ってもらえるようにプレゼンテーションすることを行い、それについて、ディスカッションをするという練習も行った。

### 工学系（私費）・文章表現

論証型レポートを書きあげること目標に授業を進めた。特にパラグラフライティングに重点を置き、パラグラフ内の構成、次にパラグラフをいかにつなげるかを学んだ。

レポートの作成は①論証型レポートにふさわしいテーマを選ぶ②データに基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い、コメントを元に書きなおす作業を行った。

### 工学系（私費）・口頭表現

論証型レポートを書きあげること目標に授業を進めた。特にパラグラフライティングに重点を置き、パラグラフ内の構成、次にパラグラフをいかにつなげるかを学んだ。

レポートの作成は①論証型レポートにふさわしいテーマを選ぶ②データに基づき本論を書く③本論から自然に導ける結論を書く④レポート全体をふまえて序論を書くという手順で行った。①～④各段階ごとに学生同士で読み合い、コメントを元に書きなおす作業を行った。

### 2年前期

#### 文系・文章表現

後期の執筆活動に向けて準備的教育を行った。各回、ニュースを視聴(シャドーイング・ディクテーションを含む)・読解し、表現を学ぶとともに、テーマを的確に捉えて文章にまとめる練習を行った。ディスカッションを通して考察を深め、最後に文章にまとめた。以上を通して表現の幅を広げるとともに、広い視野と多角的な見方を養った。

### 2年後期

#### 文系・文章表現

前期の授業をもとに、本格的な執筆活動に入った。各執筆課題（ドキュメンタリー番組の要旨説明、本や映画の紹介、エッセイ、他の授業で書いたレポートの改稿）を通して、文章の基本（オリジナルの内容を適切な表現で伝える）を養った。

# 短期留学生日本語プログラム 2018年度

石 崎 俊 子

## 1. 2018年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2018年度は前年度から大幅にプログラム内容の変更を行った。全学の日本語クラスとNUPACEの日本語のクラスを分け、NUPACE単独の日本語クラスを再編成した。近年、集中コースの受講者数が減少し、標準コースを受講する学生が爆発的に増加していた現状に対応するため、毎日2コマから1コマに変更し、単位も2単位から1単位に変更した。昨年までは上級レベルに多くの受講生が集中したという傾向があったので、レベルはNP1～8までの8レベルを用意し、上級のコースを増やした。このうち、NP1～3コースにおいては、週5日出席すること義務づけており、終了した学生には5単位を認定している。NP4～6コースはレベルやニーズに合わせて読解表現、視聴解表現、文法のクラス、NP7と8コースは読解表現、視聴解表現、研究発表を技能別に登録することが可能である。学生は1科目から最大5科目まで履修登録することができる。また、技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし、1レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。

又、「漢字コース」4科目、「総合日本語」4科目、「入門講義」4科目に加え、「ビジネス日本語」4科目、「アカデミック日本語」8科目において単位認定を行った。

「漢字コース」は「漢字1」「漢字2」「漢字3」「漢字4」、「総合日本語」は「総合日本語1」「総合日本語2」「総合日本語3」「総合日本語4」を開講しそれぞれ1単位を認定している。

以上の「漢字コース」の「総合日本語」詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え、日本語能力試験N2合格者に対しては、春学期、秋学期それぞれ4科目開講している「入門講義」の受講も認め、1科目につき2単位を認定し

ている。

又、グローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語4科目も短期留学生が受講した場合、1科目1.5単位を認定している。

単位を必要としない学生は全学の日本語コース（週3コマ）が受講可能である。

## 2. 成績評価

全学与評価基準に揃えてあり、下記の表のとおりである。出席率が80%以下の者に対しては59点以下の成績と同じくFとなる。（表1を参照）

表1 成績認定基準

成績	成績評価 (100点満点)
S	100-90
A	89-80
B	79-70
C	69-60
F	59以下

## 3. 登録状況

表2は春学期と秋学期のNUPACEの日本語コースの登録者数を示したものである。登録者数は春学期には短期留学生の81%に相当する145名中118名（異なり数）が、秋学期においては78%に相当する146名中114名（異なり数）が日本語を受講している。この割合は例年とはさほど変化がない。

又、受講者の延べ人数でみると、受講生が春学期に282名、秋学期に295名となっている。2017年度の春学期351名、秋学期317名と比較するとどちらも受講生が減少している。

## 4. 今後の課題

全学の上級のコースに受講生が多く集まるという前

期までの傾向から上級のクラスを増やしたが、前期と後期の受講人数の内訳を見てみると人数が少ないコースもある。少ないコースについてはコースの内容を変えるかもしくはNP7とNP8を合体させてもいいのではないかと考える。今年度は大規模なプログラムの変更の初年度なのでもう少し傾向を見て更なる変更が必要だと思われる。

表2 NUPACE 日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
NP 1	19	35
NP 2	20	15
NP 3	13	13
NP 4 視聴解表現	9	4
NP 4 読解表現	9	5
NP 4 文法	8	4
NP 5 視聴解表現	14	12
NP 5 読解	10	12
NP 5 文法	14	11
NP 6 視聴解表現	5	7
NP 6 読解表現	6	7
NP 6 文法	4	6
NP 7 視聴解表現	5	8
NP 7 読解表現	5	7
NP 7 研究発表	3	3
NP 8 視聴解表現	4	8
NP 8 読解表現	3	6
NP 8 研究発表	1	4
総合日本語 1	8	14
総合日本語 2	1	10
総合日本語 3	2	1
総合日本語 4	4	2
漢字 1	7	17
漢字 2	18	17
漢字 3	11	4
漢字 4	10	2
ビジネス 1		14
ビジネス 2	11	
ビジネス 3		14
ビジネス 4	11	
アカデミック (聴解・発表) 1		
アカデミック (聴解・発表) 2	7	
アカデミック (聴解・発表) 3		11
アカデミック (聴解・発表) 4	7	
アカデミック (読解・作文) 1		7
アカデミック (読解・作文) 2	3	
アカデミック (読解・作文) 3		15
アカデミック (読解・作文) 4	6	
	282	295

## 第19期 日韓共同理工系学部留学生予備教育コース

俵 山 雄 司

### 1. コースの概要

このコースでは、1998年の日韓共同宣言で提言された「21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」に基づき発足した「日韓共同理工系学部留学生事業」により配置された韓国人留学生に対し、学部入学前の予備教育として日本語教育などを提供している。

コースの目的は、以下の3つである。(括弧内は、目的に対応する科目名)

- (1) 工学部入学後の勉学や生活に役立つ日本語運用能力を養成する(会話, 聴解, 作文, 読解, 文法, 漢字・語彙, 応用会話, テーマ学習)。
- (2) 日本文化に対する理解を深める(日本事情, 全学教育科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」)。
- (3) 専門教育の土台となる基礎知識を確認する(物理, 化学, 数学)。

第19期となる今期は、平成30年9月28日から平成31年3月1日までの約6か月(実質18週)間、4名の学生を対象に開講された。

### 2. カリキュラム

#### (1) 科目内容

- ・会話：キャンパス内、日常生活で出会う場面を想定し、目的をもって、会話の相手とスムーズに話すことができる力を養う。週3コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ, Ⅱ』(名古屋大学出版会)使用。
- ・作文：「読み手」を意識して文章が書けるようになること、アカデミックライティングのルールを守って書けるようになることなどを旨とする。週2コマ。『Good Writingへのパスポート 読み手と構成を意識した日本語ライティング』(くろしお出版)使用。
- ・聴解表現：一般的な専門性の高い話題の発表を聞いて、視覚資料があれば発表の重要なポイントが理解できる力、自分の興味のある話題について、事前に準備を行えば5分程度のプレゼンテーションをすることができる力などを養成する。週1コマ。『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解 [上級]』(スリーエーネットワーク)使用。
- ・読解表現：新聞記事や政府の調査報告書を読み、特定のテーマについてポイントを理解し、それに基づいて論理的に議論をする力を身に付ける。週1コマ。自作教材使用。
- ・文法：これまでに学んだ文法事項を体系的に整理し、復習する。週1コマ。『現代日本語コース中級Ⅰ, Ⅱ』(名古屋大学出版会)使用。
- ・漢字・語彙：大学生活で必要になる上級レベルの漢字・語彙を覚え、使うことができるようになることなどを旨とする。週1コマ。『上級・超級日本語学習者のための考える漢字・語彙 上級編』(ココ出版)使用。
- ・応用会話：大学生活を行う上で必要なコミュニケーション能力・アカデミックリテラシーや、自身が身を置く状況下で、求められる能力がどのようなものであるのかを自身で把握できるようにする力を養う。週1コマ。自作教材使用。
- ・テーマ学習：身近な社会問題に関するテレビ番組を見て、映像を手掛かりに、取り上げられている問題の主要な点を理解できる力などを養成する。週1コマ。自作教材使用。
- ・日本事情：これから日本で生活していくうえで必要な、文化・社会に対する理解を深め、日本の社会や身の周りの環境に慣れていくことができることなどを旨とする。週1コマ。自作教材使用。
- ・「留学生と日本」：外国人留学生と日本人学生が討論や共同作業を通じて、日本社会や日本文化に対する理解と相互の理解を深める。週1コマ。自作教材使用。
- ・物理・化学・数学：専門教育の土台となる基礎知識を確認するとともに、その知識を日本語と結び付ける。各週1コマ。自作教材使用。



## (2) レポート作成と発表会

2月に入ってから、各自が選んだテーマに基づき資料を収集し、報告レポートを作成した。2月19日(火)には、工学部の担当教員・日本語教育担当教員・本コースの先輩学生を招いて、レポート発表会を行った。テーマは、「再生エネルギー、主要エネルギーになれるのか」「ビタミンCの真実」「BCI, インターフェイスの未来」「朝鮮時代の美術—公的・私的美術の比較を中心に—」であった。

## (3) 評価

10月2日(火)に日本語診断テスト(今年度はウェブ上のテストである「J-CAT 日本語テスト」)を使用を行い、各科目の内容や進捗を検討した。コース内の評価として、各科目において、筆記試験・口頭試験などの各種テスト、プレゼンテーション・振り返りなどの各種活動を実施した。レポート発表会後の2月下旬から3月上旬は修了試験を行った。ここでは、診断テストと同じ「J-CAT 日本語テスト」を各自で受験して

もらい、スコアを提出させ、コースを通しての日本語能力の伸びを測った。

## 3. 今期の特徴と今後の課題

まず、今期は、対象学生が4名と過去最少の数字であったため、ペアやグループでの学習を行う場合に、手順や時間配分を再考する必要があることが特徴である。

また、今期も過去2年度と同様に、各科目内で、複数の技能を統合した、より実生活での言語行動に近づけた活動を取り入れた。これについては、アウトプット活動としての発表や作文の準備の時期のバッティングが課題としてあった。今期は、担当者間で各授業の予定表を共有したり、ホワイトボードに各担当教師が予定を書いておいたりすることで、ある程度はバッティングが防げたり、課題内容の調整が可能な体制になった。来期もこれを続けていきたい。

## オンライン日本語コースの運営

石 崎 俊 子 ・ 佐 藤 弘 毅

名古屋大学国際機構国際言語センターでは、日本語を学びたいが日程の都合で対面での授業に参加できない留学生向けに、Web上で教材の提供・回答の採点・添削等を行うオンラインコースを用意している。中上級の学習者向けの読解・作文コースと初級から中級の学習者向けの漢字コースの2種類があり、CMS (Course Management System) である moodle を用いて行っている。

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。登録者数は履修登録を行った人の数を、受講者数は一度でもコースにアクセスした人の数を、修了者数は各コースの修了要件を満たした人の数である。

### 【オンライン読解・作文コース】

春学期	登録者数：26	秋学期	登録者数：35
	受講者数：7		受講者数：8
	修了者数：1		修了者数：1

2018年度オンライン読解・作文コースの修了者数(14課中10課以上60%以上の成績)は春学期1名、秋学期1名であった。

### 【オンライン漢字コース】

春学期	登録者数：23	秋学期	登録者数：67
	受講者数：6		受講者数：13
	修了者数：2		修了者数：4

2018年度オンライン漢字コースの修了者数(10課中80%以上の成績)は春学期2名、秋学期4名であった。

各期各コース共に例年並みの20数名以上の履修登録者があり、特に近年10月から新しく渡日する留学生の増加に伴い秋学期の登録者数が多くなっている。このことから、コースに対するニーズは依然として高いことが伺える。しかし、実際にコースに一度でもアクセスした人の数(受講者数)は、履修登録者数の20%程度と低い割合であった。また、最後までコースを続けて修了要件を満たした人は数名しかいなかった。この傾向はここ数年続いている。

多くの受講者は、研究などの活動を受けながら各自のペースで日本語を勉強するためにオンラインコースに登録したものの、実際には忙しくてなかなかコースにアクセスする時間が取れないものと推察される。しかし、たとえ最後までコースを続けられなくとも、受講者が自分のペースでいつでも学習できる環境が用意されていることには意味があると考えている。今後も受講者の意見を取り入れながら、引き続き利用しやすいオンラインコースの運営を続けていきたいと考えている。



## 名古屋大学短期日本語プログラム（NUSTEP）2018年度実施報告

許 明 子

### 1. はじめに

本学における2週間の短期日本語プログラム(以下、NUSTEP)は2016年度2月から始まり、年2回(7月と2月)実施され、これまで5回実施されている。本プログラムの目的は、本学と協定を締結している海外の大学に在学している学生を対象に、本学の研究および教育について体験してもらい、将来の日本への留学のきっかけを作ることである。

2016年度、2017年度は国際教育交流センター国際プログラム部門が中心になって、本プログラムの企画、運営を行ってきた。2018年度10月に本プログラムのコーディネーターである許明子が国際言語センターに着任し、国際言語センターが中心となって本プログラムの運営を行うことになった。また、昨年度まで国

際教育交流センターの特任講師で本プログラムのコーディネーターとして携わっている松尾憲暁氏は本プログラムのアシスタントコーディネーターとして事務補助を担当した。

本稿では、2018年春季プログラムとして2019年2月7日(木)から2月21日(木)に実施されたプログラムについて報告する。

### 2. プログラム概要

これまでに実施された5回のNUSTEPの実績に基づいて、春季プログラムも同様な内容でプログラムの運営を行った。プログラムの概要は以下の<表1>の通りである。

<表1> 春季プログラムのスケジュールと内容

	2月7日	2月8日	2月9日	2月10日	2月11日	2月12日	2月13日
午前	入居	開講式	エクスカーション (フィールド・トリップ)	自由行動	日本語1	日本語3	日本語5
		オリエンテーション、歓迎会			日本語2	日本語4	日本語6
午後		クラス分けテスト			日本語研究I	日本語研究II	専門講義 (ラボ見学)
		キャバ巢ツアー				名大生との交流 (サークルとの交流)	
	2月14日	2月15日	2月16日	2月17日	2月18日	2月19日	2月20日
午前	日本語7	日本語9	ホームビジット	自由行動	日本語11	日本語13	日本語15
	日本語8	日本語10			日本語12	日本語14	日本語16
午後	日本語研究III	日本語研究IV			専門講義 (ラボ見学)	自主学習	終了式・ 歓送会

本プログラムの内容は、日本語の研修や日本の文化を体験するだけでなく、名古屋大学の研究活動を体験することによって、将来に正規の留学生として名古屋大学に戻って来るきっかけになるよう設計されている。東海地方を中心とする日本文化を体験しながら、名古屋大学のラボ見学および専門講義（文系、理系）を受ける等、日本文化体験と名古屋大学のアカデミック・ライフの体験の両方ができるように設計されているのが本プログラムの最も大きな特徴である。

### (1) 日本語

日本語の授業はA、Bクラスの2クラスに分かれて実施された。Aクラスは加藤淳氏、Bクラスは宗林由佳氏が授業を担当した（写真2）。

日本語の授業はクラスのメンバーとボランティアとして授業に参加した日本人学生がグループになり、議論や意見交換を行うワークショップ中心の授業を行った。ボランティアで参加した日本人学生や参加者同士がディスカッションを行うことによって、日本研究Ⅰ～Ⅳへのアウトプットにつなげていくような形で授業を進めた。

日本語の授業内容の概要は以下の〈表2〉の通りである。

### (2) 日本研究と文化体験

日本研究Ⅰ：愛知県の伝統産業（有松絞り体験）

日本研究Ⅱ：日本の伝統と文化（着物の着付体験）

日本研究Ⅲ：愛知県の産業（トヨタ産業技術記念館の見学）

日本研究Ⅳ：現代の社会と日本の若者（日本語によるインタビュー）

上記の日本研究Ⅰ～Ⅳはエクスカージョンや着物の着付等の体験を通して学べるように設計されている。日本研究Ⅰはエクスカージョンとして有松絞りを体験し、愛知県の伝統産業と文化を学び（写真3）、日本研究Ⅱは着物の着付体験を通して日本人の生活や習慣について学んだ。日本研究Ⅲはトヨタ産業技術記念館を見学し愛知県の産業を代表する自動車産業に学び、日本研究Ⅳは名大生を中心とした日本の若者を対象に、インタビューを行ったりゲームをしたりする等の国際交流を行った。

その他に、名古屋大学のよさこいサークルの「快踊乱舞」の学生との交流（写真4）や、日本人ノ家庭を訪問し交流するホームビジット（オプション）等、日本人の生活について理解を深めるための内容も含まれている。

〈表2〉 日本語の授業内容

回	授業日	学習内容
1	2月11日（月）	聴解：名古屋や中部地域
2		聴解：「名古屋の食文化」／メモの取り方（報告準備）
3	2月12日（火）	読解：「日本事情（社会・文化・人）トピックディスカッション
4		総合：発表準備②
5	2月13日（水）	読解・会話：「日本の文化」読んで話す
6		発表：日本研究Ⅰ、日本研究Ⅱ 伝統と文化報告
7	2月14日（木）	読解：「日本のモノづくり・人作り」
8		総合：トヨタ産業技術記念館見学 報告準備／情報の取り方
9	2月15日（金）	発表：日本研究Ⅲ 産業技術記念館見学報告
10		総合：報告準備／インタビューの仕方
11	2月18日（月）	発表：日本研究Ⅳ インタビュー報告
12		総合：発表準備③ 原稿作成／アウトライン
13	2月19日（火）	総合：発表準備④ 原稿作成
14		発表準備⑤ 発表練習
15	2月20日（水）	最終発表
16		

### 3. 参加者

春季プログラムには29名が参加した。各大学からの参加者は以下の<表3>の通りである。

<表3> 春季プログラムの参加者

モンゴル国立大学 (1名)
浙江大学 (3名)
国立中正大学 (1名)
国立台湾大学 (2名)
華中科技大学 (2名)
南京大学 (2名)
国立清華大学 (2名)
東北大学 (2名)
吉林大学 (3名)
同済大学 (2名)
国立政治大学 (1名)
ワルシャワ大学 (1名)
ホーチミン市法科大学 (1名)
中国科学技術大学 (1名)
ハルビン工業大学 (2名)
大連理工大学 (3名)

協定校からプログラムに参加を希望した申請者は合計79名だったが、NUSTEP 運営委員会での選考を通して29名を受け入れた。本プログラムに実施を希望する学生が多いだけでなく、今期は初めてワルシャワ大学やモンゴル国立大学、ホーチミン市法科大学からも参加しており、本プログラムの認知度が益々高まっていることを実感することができた。

### 4. NUSTEP 運営委員会

本プログラムは国際機構の国際化を担う特別プログラムとして位置づけられており、国際言語センターおよび国際教育交流センターの両センターの関係者が協力してプログラムを運営している。NUSTEP 運営委員会を通して参加者の選考を行い、両センターの教員

が分担してプログラムの内容を担当している。

以下、NUSTEP の運営委員および担当内容を紹介する。

- 許明子 (国際言語センター, NUSTEP 運営委員会委員長) — コースコーディネーター
- 衣川隆生 (国際言語センター) — 日本語クラス分けテスト, 授業補助
- 伊東章子 (国際教育交流センター教育交流部門) — オリエンテーションの準備および実施, 開講式・歓迎会・歓送会の実施, 専門講義
- 河嶋春菜 (国際教育交流センター海外留学部門) 学生ボランティアの募集
- 田中京子 (国際教育交流センター, アドバイジング部門) — 着物講座, ホームビジット
- Matthew Linley (国際教育交流センター国際プログラム部門) プログラムの評価アンケート調査および集計

### 5. おわりに

本プログラムは2016年度春季プログラムから開始され、今回で6回目の実施となった。過去のプログラム運営の実績を踏まえて今期のプログラムを運営したが、プログラムに参加した学生からは満足度が高く、活動内容について全体的に非常に高い評価が得られた。本プログラムの特徴である日本の文化および名古屋大学の高いレベルの研究活動が同時に体験できる日本語の研修という点で、高く評価されたと思われる。海外の協定校に在学している学生にとっては今後の日本研究、日本への留学につながる貴重な研修になっていることは間違いないだろう。

本プログラムが今後の名古屋大学の一步進んだ国際化の活性に向けて一助になることを願う。

【資料】2018年度春季プログラムの様子



写真1 開講式 (2019年2月8日)



写真2 日本語の授業



写真3 日本研究 I (有松絞り体験)



写真4 名大生との交流 (よさこいサークル)



# 資 料

---

歴代国際言語センター長  
平成30年度 国際言語センター専任教員  
平成30年度 日本語コースの担当者  
平成30年度 授業担当および学位論文審査  
平成30年度 国際言語センター教員研究業績  
平成30年度 国際言語センター研究会記録  
平成30年度 国際言語センター全学委員会委員  
国際言語センター沿革





## 歴代国際言語センター長

### 留学生センター

初代	馬越 徹	1993年4月～1995年3月
第二代	石田 眞	1995年4月～1999年3月
第三代	塚越 規弘	1999年4月～2001年3月
第四代	末松 良一	2001年4月～2005年3月
第五代	江崎 光男	2005年4月～2007年3月
第六代	石田 幸男	2007年4月～2011年3月
第七代	町田 健	2011年4月～2013年9月

### 国際言語センター

初代	福田 眞人	2013年10月～2017年3月
第二代	大室 剛志	2017年4月～2019年3月

## 平成30年度 国際言語センター専任教員

センター長 大室 剛志 (2017年4月～2019年3月)

### 日本語・日本文化教育部門

教授	初山 洋介
教授	浮葉 正親
教授	衣川 隆生
教授	許 明子 (2018年10月～)
准教授	石崎 俊子
准教授	李 澤熊
准教授	佐藤 弘毅
准教授	俵山 雄司
准教授	永澤 斉

## 平成30年度 日本語コースの担当者

### 1. 日本語研修 コース

#### 〈前期：第78期〉

衣川 隆生	安井 澄江
佐藤 弘毅	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

#### 〈後期：第79期〉

衣川 隆生	安井 澄江
佐藤 弘毅	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

### 2. 日本語・日本文化研修コース

#### 〈2017年10月～2018年9月：第37期〉

初山 洋介	向井 淑子
永澤 濟	松岡みゆき
中川 康子	石川 公子
西田 瑞生	

### 3. 教養科目「留学生と日本 —異文化を通しての日本理解」

#### 〈後期〉

高木ひとみ	和田 尚子
浮葉 正親	富岡 良子

### 4. 全学向け日本語コース

#### 〈前期〉

李 澤熊	安井 澄江
浮葉 正親	大羽かおり
石崎 俊子	服部 淳
佐藤 弘毅	松木 玲子
衣川 隆生	中川 康子
俵山 雄司	向井 淑子
永澤 濟	加藤 淳
石川 公子	田中 典子
久野伊津子	呉 禔受
宗林 由佳	馬場 典子
高橋 伸子	香川由紀子
高安 葉子	藤森 秀美
嶽 逸子	池田菜採子
西田 瑞生	山崎 智子

#### 〈後期〉

李 澤熊	安井 澄江
浮葉 正親	大羽かおり
石崎 俊子	服部 淳
佐藤 弘毅	松木 玲子
衣川 隆生	中川 康子
俵山 雄司	加藤 淳
永澤 濟	田中 典子
石川 公子	呉 禔受
久野伊津子	馬場 典子
宗林 由佳	香川由紀子
高橋 伸子	藤森 秀美
高安 葉子	池田菜採子
嶽 逸子	山崎 智子
西田 瑞生	

## 5. NUPACE 日本語コース

### 〈前期〉

浮葉 正親	安井 澄江
石崎 俊子	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
石川 公子	松木 玲子
中川 康子	田中 典子
久野伊津子	呉 禱受
宗林 由佳	馬場 典子
高橋 伸子	香川由紀子
高安 葉子	藤森 秀美
嶽 逸子	池田菜採子

### 〈後期〉

浮葉 正親	安井 澄江
石崎 俊子	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
佐藤 弘毅	松木 玲子
石川 公子	田中 典子
中川 康子	呉 禱受
久野伊津子	馬場 典子
宗林 由佳	香川由紀子
高橋 伸子	藤森 秀美
高安 葉子	池田菜採子
嶽 逸子	

## 6. 学部留学生を対象とする言語文化科目 〈日本語〉

### 〈前期〉

浮葉 正親	西田 瑞生
永澤 濟	藤森 秀美
鷺見 幸美	

### 〈後期〉

浮葉 正親	西田 瑞生
永澤 濟	藤森 秀美
鷺見 幸美	馬場 典子

## 7. 日韓理工系学部留学生日本語プログラム

### 〈2018年10月～2019年3月〉

俵山 雄司	内山喜代成
李 澤熊	山田 裕子
梶原 彩子	安藤 郁美
千葉 月香	

## 平成30年度 授業担当および学位論文審査

### I. 授業担当 (大学院・教養教育院・NUPACE)

#### 1. 大学院

##### 人文学研究科 (国際言語文化研究科の担当科目名は省略)

梶山洋介：現代日本語学研究 a (前期 1 コマ 2 単位)	石崎俊子：日本語教材開発総合演習 a (前期 1 コマ 2 単位)
日本語意味論特殊研究 a (前期 1 コマ 2 単位)	日本語教材開発総合演習 b (後期 1 コマ 2 単位)
許 明子：現代日本語学研究 b (後期 1 コマ 2 単位)	応用日本語学研究Ⅲ (後期 1 コマ 2 単位)
日本語意味論特殊研究 b (後期 1 コマ 2 単位)	佐藤弘毅：日本語教育工学特論 a (前期 1 コマ 2 単位)
李 澤熊：日本語意味論総合演習 a (前期 1 コマ 2 単位)	日本語教育工学特論 b (後期 1 コマ 2 単位)
日本語意味論総合演習 b (後期 1 コマ 2 単位)	応用日本語学研究Ⅳ (後期 1 コマ 2 単位)
日本語文法論Ⅰ (前期 1 コマ 2 単位)	浮葉正親：日本事情論 (前期 1 コマ 2 単位)
テキスト学Ⅰ (後期 1 コマ 2 単位)	日本言語文化論 (後期 1 コマ 2 単位)
永澤 済：日本語語彙論特殊研究 a (前期 1 コマ 2 単位)	
日本語語彙論特殊研究 b (後期 1 コマ 2 単位)	
日本語文法論Ⅱ (後期 1 コマ 2 単位)	
衣川隆生：応用日本語学研究Ⅰ a (前期 1 コマ 2 単位)	
応用日本語学研究Ⅰ b (後期 1 コマ 2 単位)	
日本語教育方法論発展演習 a (前期 1 コマ 2 単位)	
日本語教育方法論発展演習 b (後期 1 コマ 2 単位)	
比較社会文論 (前期 1 コマ 2 単位)	
オムニバスの2コマを担当	
俵山雄司：日本語談話分析総合演習 a (前期 1 コマ 2 単位)	
日本語談話分析総合演習 b (後期 1 コマ 2 単位)	

#### 2. 教養教育院

浮葉正親：基礎セミナー A「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」 (前期 1 コマ 2 単位)
浮葉正親・高木ひとみ・和田尚子 ：全学教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解」 (後期 1 コマ 2 単位)
佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー (文系)」 (前期 1 コマ 2 単位)
永澤 済：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語Ⅰ」 (前期 1 コマ 1.5 単位)
永澤 済：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語Ⅱ」 (後期 1 コマ 1.5 単位)
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語Ⅰ」 (前期 1 コマ 1.5 単位)
浮葉正親：全学基礎科目「言語文化Ⅰ日本語Ⅰ」 (後期 1 コマ 1.5 単位)
永澤 済：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語Ⅰ」 (前期 1 コマ 2 単位)

永澤 濟：全学基礎科目「言語文化Ⅱ日本語2」  
(後期1コマ 2単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学1」  
(秋学期1コマ 2単位)

### 3. 名古屋大学短期交換留学プログラム (NUPACE)

浮葉正親：入門講義「日本文化論1」  
(秋学期1コマ 2単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学2」  
(春学期1コマ 2単位)

浮葉正親：入門講義「日本文化論2」  
(春学期1コマ 2単位)

香川由紀子：入門講義「日本文学1」  
(秋学期1コマ 2単位)

香川由紀子：入門講義「日本文学2」  
(春学期1コマ 2単位)

## II. 学位（博士）論文審査

○衣川隆生（主査）

論文提出者：内山喜代成（国際言語文化研究科）

提出論文：海外の日本語教育機関における教師と  
学習者の教室観

提出論文：海外の日本語教育機関における教師と  
学習者の教室観

○李 澤熊（主査）

論文提出者：関ソラ（国際言語文化研究科）

提出論文：現代日本語におけるカテゴリーの周辺  
例を明示する表現に関する考察

○許 明子（副査）

論文提出者：内山喜代成（国際言語文化研究科）

提出論文：海外の日本語教育機関における教師と  
学習者の教室観

○浮葉正親（副査）

論文提出者：内山喜代成（国際言語文化研究科）

○永澤 濟（副査）

論文提出者：関ソラ（国際言語文化研究科）

提出論文：現代日本語におけるカテゴリーの周辺  
例を明示する表現に関する考察

## 平成30年度 国際言語センター教員研究業績

### 李 澤熊

#### 論文

- 1) 李澤熊 (2019.3) 「動詞「殺す」の多義構造—日本語教育の観点から—」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』第26号, pp.1-14, 名古屋大学国際言語センター.
- 2) 李澤熊 (2019.3) 「動詞「のびる」の多義構造」『名古屋大学人文学研究論集』第2号, pp.177-195, 名古屋大学人文学研究科.
- 3) 李澤熊 (2018.5) 「「腐る」と「腐敗する」の意味分析—百科事典の意味観に基づく日韓対照研究—」『日本認知言語学会論文集』18巻, pp.209-219, 日本認知言語学会.

#### 口頭発表・講演

- 1) 李澤熊 (2018.9) 「「決める」と「定める」の意味分析—韓国語動詞「정하다 (jeonghada)」と比較して—」, 日本認知言語学会第19回, 於静岡大学
- 2) 李澤熊 (2018.8) 「「決める」と「定める」の意味分析—韓国語動詞「정하다 (jeonghada)」と比較して—」, 現代日本語学研究会第174回, 於名古屋大学
- 3) 李澤熊 (2018.7) 「現代日本語の意味研究—日本語教育への応用—」基調講演, 中部地区・大学院日本語学・日本語教育セミナー, 於名古屋大学

#### その他

- 1) 李澤熊 (2019.3) 「のびす」『基本動詞ハンドブック』, 「国立国語研究所・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>).
- 2) 李澤熊 (2019.3) 「のびる」『基本動詞ハンドブック』, 「国立国語研究所・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」 (<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>).

### 石崎俊子

#### 著書

- 1) 石崎俊子 (2019) 「反転授業を意識した教材開発のための実践授業」 當作靖彦 (監修), 李在鎬 (編)

『ICT × 日本語教育』 ひつじ書房, pp.100-111

### 浮葉正親

#### 論文

- 1) 浮葉正親 (2018) 「柳田民俗学は乗り越えなくてはならないんだ—松山義雄氏訪問の記とその初期作品について—」『伊那民俗』第114号, 柳田國男記念伊那民俗学研究所, 2-4頁

#### 研究報告

- 1) 浮葉正親 (2018) 「ソウルの村祭り紀行4 龍山区 普光洞明化殿 (金庾信將軍祀堂クッおよび小括)『季刊はぬるはうす』第57号, NPO 法人ハヌルハウス, 30-34頁
- 2) 浮葉正親 (2018) 「天空の里の<現在 (いま)>を記録・記憶する—写真集『天空の里 遠山郷・下栗』に寄せて—」『天空の里 遠山郷・下栗 白鳥恵靖写真集』新日本出版社, 122-124頁

#### 発表

- 1) 浮葉正親 (2018) 「研究者として日韓関係に向き合う—在日朝鮮人問題を中心に—」名古屋日・韓平和シンポジウム, 2018年11月3日, 名古屋大学文学部

### 佐藤弘毅

#### 口頭発表

- 1) 佐藤弘毅 (2019) 電子黒板を用いた授業において「教師が見える」ことがノートテイキングに及ぼす影響, 教育システム情報学会研究会報告, Vol.33, No.6, pp.93-100

### 俵山雄司

#### 論文

- 1) 水野瑛子・柴田龍希・俵山雄司 (2019) 「討論の行き詰まりに対する話題展開—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第26号, pp.35-56.



#### 発表

- 1) 俵山雄司 (2018) 「旅行をテーマとした談話における引用と感情表出—生き生きとした話し方を探る—」第8回談話分析コロキウム, 2018年12月22日, 山形テルサ

#### 永澤 済

##### 論文

- 1) 永澤済 (2019) 「留学生への作文教育 (2) —クラスにおける相互の高め合い—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第26号, pp.57-89, 名古屋大学国際言語センター

##### 口頭発表

- 1) 永澤済 (2018) 「漢語動詞自他の特殊用法と変化」現代日本語学研究会 (第175回), 10月, 於名古屋大学

#### 許 明子

##### 論文

- 1) 許明子・永井絢子 (2018) 「いかに初対面同士の会話を促進するか?—同年代の日本人と韓国人の会

話に見られるほかし表現とフィラー表現の分析—」『日本語用論学会第20回大会発表論文集』第13号129-136頁

##### 研究発表

- 1) 清水春花・肖宇彤・許明子 (2018) 「日本語学習者の受身文の運用能力をいかにレベルアップさせられるか? 中級レベルの文法クラスにおける実践を通して」第51回日本語教育方法研究会, 2018年9月8日 (於国士舘大学町田キャンパス)
- 2) 許明子 (2018) 「日韓中の初対面話者同士の会話に見られる補助動詞の使用—話し手の視点と「場」の共有に注目して—」第十二回国際日本語教育・日本研究シンポジウム, 香港日本語教育研究会, 2018年12月8日 (於香港理工大学)

##### 招聘講演

- 1) 許明子 (2018) 「日本語と韓国語のコミュニケーション・スタイルの異同—発話内容と表現形式の比較を通して—」韓国外国語大学 CORE 事業海外研究者招聘講演会, 2018年11月30日 (於韓国外国語大学)

## 平成30年度 国際言語センター研究会記録

### 教員による研究会

#### 現代日本語学研究会

(関係教員：李澤熊／永澤濟)

本研究会は、現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む）、「意味論」「文法論」「語彙論」等の分野で研究を行っている研究者（教員、大学院生等）の集まりである。ただし、参加者の研究の枠組みは多岐にわたり、理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また、認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は、原則として、（近い将来）研究発表が可能な者とし、研究の水準は修士論文以上を目安としているが、学部レベルの参加者もいる。

2018年度に開催された研究会は以下の通りである。

#### 第173回

2018年5月26日

発表者：陳 奕廷（三重大学）

発表題目：N-V 型複合動詞に対するフレーム・コンストラクション的アプローチ

#### 第174回

2018年7月28日

##### 第1発表

発表題目：多義動詞の分析 — 特徴の記述と分析方法の精緻化

司会・ディスカッサント：柁山洋介（南山大学）

発表者：木下りか（武庫川女子大学）、李 澤熊（名古屋大学）、有蘭智美（名古屋学院大学）、野田大志（愛知学院大学）

##### 第2発表

梶川克哉（名古屋 SKY 日本語学校）：メンタル・スペース理論に基づく「～ために」と「～ように」の考察

##### 第3発表

関 ソラ（保育・介護・ビジネス名古屋専門学校〔非常勤〕）：発話におけるカテゴリーの中心例に関する一考察—カテゴリーの周辺例を明示する表現を通して—

##### 第4発表

滝 理江（名古屋大学大学〔院〕）：助詞トカの意味分析—カテゴリーの観点から—

##### 第5発表

栗木久美（名古屋大学大学〔院〕）：類義表現としての形容詞「高い」「深い」の意味分析—非空間的用法を中心に—

##### 第6発表

山田裕子（名古屋大学大学〔院〕）：疑いの疑問文「～だろうか」の意味の分析—「疑念」と「反語」の意味の連続性について—

##### 第7発表

小川朱美（名古屋大学大学〔院〕）：流動物が容器の外に出る事象を表す動詞の意味拡張—「こぼれる」と「もれる」におけるフレームが果たす役割—

#### 第175回

2018年10月20日

発表者：永澤 濟（名古屋大学）

発表題目：「漢語動詞自他の特殊用法と変化」

#### 第176回

2018年11月17日

発表者：濱野寛子（名古屋学院大学）

発表題目：助数詞「件」の意味分析—認知言語学的観点から

#### 第177回

2018年12月22日

発表者：梶川克哉（名古屋 SKY 日本語学校）

発表題目：〈表面接着〉から広がる「かける」の多義

#### 第178回

2019年3月23日

発表者：柁山洋介（南山大学）

発表題目：「もじり」の意味論

## 平成30年度 国際言語センター全学委員会委員

### 2018年度（平成30年度）国際機構全学委員会委員

（平成30年4月～）

委 員 会 名	国際言語センター	任期	期 間
国際機構会議	センター長		5号委員
国際交流委員会	衣川 隆生	2年	平成30年4月1日～令和2年3月31日
国際教育運営委員会	衣川 隆生		平成29年4月1日～平成31年3月31日
交換留学実施委員会	石崎 俊子		5号委員
全学教育企画委員会	浮葉 正親	2年	平成29年4月1日～平成31年3月31日
附属図書館商議委員会 オブザーバー	佐藤 弘毅	2年	平成30年4月1日～令和2年3月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤 弘毅		
全学同窓会幹事会	李 澤熊		
こすもす保育園運営協議会	石崎 俊子	2年	平成30年4月1日～令和2年3月31日
教養教育院統括部 専門委員会 各部会・小部会委員	浮葉 正親	1年	平成30年4月1日～平成31年3月31日

### 平成30年度 国際機構 国際言語センター内部委員会委員

（平成30年4月～）

委員会名	部会・WG	国際言語センター（H29委員）
総務委員会	特昇 WG	<u>衣川</u>
財務・施設委員会	経理・整備 WG	衣川・李
	情報セキュリティ WG （両センター合同）	<u>佐藤</u>
	安全・防災部会 （両センター合同）	<u>衣川</u> ・永澤・石崎
広報委員会	広報・紀要部会	<u>浮葉</u> ・李・佐藤・俵山
	ホームページ部会	<u>石崎</u>
	日本語・日本文化論集編集部会	<u>永澤</u> ・浮葉

## 国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任, 「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され, 総合言語センター発足 総合言語センターの1部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として, 「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の2部門体制) 留学生センターとして, これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ, (1994.2), 研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによる WebCMJ のオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア・システム開発部門」発足 (留学生センター4部門体制となる)
8		担当助教授着任 (ハリソン)
2000. 4		二人目の担当助教授着任 (大野)
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授1名退任 (藤原)	
4	講師1名採用 (李)	
2004. 2		助教授1名転任 (ハリソン)
3	助教授1名退任 (神田)	
4		WebCMJ 多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授1名採用 (石崎)
2005. 3		助教授1名転任 (大野)

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 1) 全学日本語プログラム(集中コース, 標準コース, 漢字コース, 入門講義, オンライン日本語コース) 2) 特別日本語プログラム(初級日本語特別プログラム, 上級日本語特別プログラム, 学部留学生向け日本語授業, 日韓理工系学部留学生プログラム)	教授1名日本語・日本文化教育部門から配置換え(村上) オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師1名採用(佐藤)	
2006. 3	教授1名転任(尾崎)	
4	助教授1名採用(衣川)	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授1名昇任(昀山)	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授1名昇任(李)	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授1名着任(初鹿野:国際交流協推進本部)	
2010. 2	特任准教授1名着任(徳弘:国際交流協推進本部)	
2011. 3		TNeとよた日本語eラーニング会話編(市役所, 病院, 学校)完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編(ひらがな, カタカナ, 履歴書)完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成(17言語) 「名古屋大学日本語コース中級I&II」オンライン及びデジタル版の開発 TNeとよた日本語eラーニング会話編5カ国版完成 TNeとよた日本語eラーニング文字編5カ国版完成
2013. 4	教授2名昇任(浮葉, 衣川)	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い, 留学生センター日本語・日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は, 「国際言語センター」に改組(「日本語・日本文化教育部門」・「英語教育部門」の2部門体制)。	
2014. 4	准教授1名昇任(佐藤)	
2015. 2	国際言語センターホームページ改訂	
3	教授1名定年退職(村上)	
4	准教授1名採用(俵山)	
2016. 2	G30日本語教育担当教員2名「国際教育交流センター」へ配置換え	
3	教授1名定年退職(鹿島)	
4	講師1名採用(永澤)	
2018. 1	准教授1名昇任(永澤)	
3	教授1名転任(昀山)	

日本語・日本文化教育部門	
2018. 10	教授 1 名着任 (許)
2019. 3	教授 1 名転任 (衣川)



## 編集後記

2018年度4月に、国際言語センターの留学生教育カリキュラムは大きな変化を迎えた。具体的には、半年、あるいは1年間の交換留学生（NUPACE 学生）は、従来、全学向け日本語プログラムに参加して日本語を学んでいたのが、NUPACE 学生専用のコースを設置して、そちらで学ぶようになったことである。これにより、各コースのレベル設定、教材、教授法などの変更が行われた。その準備・運営の作業は、心身ともにハードなものであった。しかし、新しい言語教育の流れを踏まえた教材・教授法で教えることは、私たちにとっても新鮮な経験であり、教師として心浮き立つ場面も少なくない。教師が感じる高揚感が、学生にも伝わり、学習効果につながるのでは、などと夢想しながら奮闘努力する毎日である。

(YT)

### 名古屋大学国際機構 国際言語センター年報 第6号

2019年12月2日 印刷・発行

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

編集者 名古屋大学国際機構  
国際言語センター

電話 (052) 789-2198

FAX 789-5100

印刷所 株式会社 荒川印刷  
名古屋市中区千代田2-16-38  
電話 (052) 262-1006



Nagoya University Institute of International Education & Exchange  
International Language Center  
Annual Report Vol. 6